作者覚書

この劇を上演する際、最も問題となるのは、二つの異なる時代のあいだの場面転換、衣裳替えを効率よく行なうことだろう。この問題の処理は演出家や美術家次第だが、いくつか考えを記しておく。

劇の冒頭は、一九五〇年代に上演される一九五〇年代の客間劇を見ているように感じられるのがいいだろう。ただし、劇が進むにつれ、その世界はゆっくりと崩壊し、ばらばらになっていく。家具や壁は次第に消えていき、後半になるとさまざまな場所へ移っていく。つまり説明的であったセットが場所を暗示するものとなっていく。ベンチ一脚で公園を表わし、ソファ一脚でシルヴィアのアパートを表わすのである。

一つの案としては、衣裳替えをうまく利用すること――できれば舞台上で行ない、観客にも一部見えるようにするといいだろう。より様式的な方法。そうすれば、連続する場面で俳優が異なる時代の役を演じる場合に役立つだろう。

最も重要なのは合流していくこと。二つの異なる時代が互いに溶け合っていくことだ。彼らは、外見でははっきり異なっていても、精神ではお互いを知っている――一人の若い女性のとなりには、成長した彼女の自我が立っているのだ。衣服がちがう、ヘアスタイルがちがう、肌のきめがちがう……けれども目だけは同じだ。過去は亡霊となって現在に姿を現わし、同時に現在は先見の亡霊となって過去に姿を現わすのである。

登場人物

一九五八年
オリヴァー　三十代半ば
フィリップ　三十代半ば
シルヴィア　三十代半ば
医者　三十代後半

二〇〇八年
オリヴァー　三十代半ば
フィリップ　三十代半ば
シルヴィア　三十代半ば
男
ピーター

二つの時代のオリヴァー、フィリップ、シルヴィアは同じ俳優が演じる。一人の俳優が医者、男、ピーターを演じる。

場所

ロンドン

時

一九五八年と二〇〇八年

第1場　一九五八年

ロンドンにあるフィリップとシルヴィアのアパート。質素だが趣味がよい。たくさんの本、ソファ一脚とアームチェア数脚、壁に二、三枚の絵画。
フィリップが玄関口に立っている。夜の外出着を着ている。オリヴァーが着いたところである。

1 オリヴァー　フィリップ。
2 フィリップ　オリヴァー。
3 オリヴァー　うん。
4 フィリップ　ついに。
5 オリヴァー　うん。
6 フィリップ　いろいろ聞いてるよ。
7 オリヴァー　え？
8 フィリップ　君のこといろいろ。
9 オリヴァー　まいったな。
10 フィリップ　全部いいこと。
11 オリヴァー　ならよかった。
12 フィリップ　シルヴィアはいつも君の話をしてる。
13 オリヴァー　本当に？
14 フィリップ　おかげで嫉妬しそうだ。
15 オリヴァー　その必要はない。
16 フィリップ　君を天才だと思ってるらしい。
17 オリヴァー　僕にもいろんな顔があるけれど、天才だけはちがう。
18 フィリップ　普通じゃないって。
19 オリヴァー　そう？
20 フィリップ　普通とはちがうって。

わずかな間。

21 フィリップ　コート預かろう。
22 オリヴァー　ありがとう。

オリヴァー、コートを脱ぎ、フィリップに渡す。フィリップはそれをていねいに掛ける。

23 フィリップ　ご婦人は少々遅れてるらしい。フェイス・ペイントってやつだな。
24 オリヴァー　僕が早く着いたから。
25 フィリップ　いや。時間どおりだ。
26 オリヴァー　歩いてきたんだ。もうすこしかかると思ってた。
27 フィリップ　気持ちいい夜だ。
28 オリヴァー　うん、雨は降ってない。
29 フィリップ　メイダ・ヴェールからずっと？
30 オリヴァー　そう、メイダ・ヴェールから。
31 フィリップ　公園を抜けて？
32 オリヴァー　そう。
33 フィリップ　ずいぶん歩いたね。
34 オリヴァー　楽しかった。

35 フィリップ　いい季節だし。
36 オリヴァー　花が咲き乱れてた。
37 フィリップ　いいね。

わずかな間。

38 フィリップ　飲みもの、何にしよう？
39 オリヴァー　スコッチは？
40 フィリップ　氷と水？
41 オリヴァー　ぜひ。
42 フィリップ　僕もそうしよう。

フィリップ、小さなドリンクテーブルへ行き、二人分の酒を注ぐ。

43 フィリップ　彼女、君の物語は素晴らしいって。
44 オリヴァー　精神をとらえてくれてる。
45 フィリップ　本当に好きらしい。その本がね。
46 オリヴァー　彼女、すごく、すごく才能がある。
47 フィリップ　話し出したら止まらないんだ。何か、花園のこと。
48 オリヴァー　まあ、どちらかと言えばジャングルだけど。
49 フィリップ　ジャングル。
50 オリヴァー　イギリスのど真ん中のジャングルと言おうか。それかせめてうっそうとした熱帯の花園か。
51 フィリップ　なぜ児童文学の作家は花園を好むんだろう？やたらと書かれているようだけど。たいてい、秘密の花園ってやつだな。
52 オリヴァー　たしかに。
53 フィリップ　まあ、おかげで彼女は大忙し。妙な生きもののスケッチがあちこちに散らばってる。このあいだなんか、ぎょっとする絵がバスルームにあった。頭が二つあるアンテロープみたいな。実にそそられる。
54 オリヴァー　きっとベリーフィンチだ。金曜の朝に見せてもらうことになってるやつだ。
55 フィリップ　ベリーフィンチ、それだ。それにひきかえ、僕の人生なんて味気ないものに見えるだろうな。
56 オリヴァー　味気ない人生なんてものはないよ。
57 フィリップ　君は生活のために不動産を売り歩いたことがないだろう。
58 オリヴァー　未開拓ならまだしも、味気ないなんて。

フィリップ、オリヴァーに飲みものを渡す。二人座る。

59 フィリップ　君のような人には会ったことがない。作家にはね。
60 オリヴァー　そう？
61 フィリップ　一人、母の気色悪い友人を除いては、お菓子の焼き方の本を出してる。
62 オリヴァー　お菓子の焼き方？
63 フィリップ　重要な本とは言えないだろうね。
64 オリヴァー　それは少々失礼だよ。お菓子の本は悪くない。
65 フィリップ　これまで書いたのは子供の本だけ？
66 オリヴァー　だいたいは。旅行書も二冊。
67 フィリップ　シルヴィアが言ってた。一冊はアテネの。
68 オリヴァー　一年住んでた。
69 フィリップ　もう一冊は？

70 オリヴァー　もう一冊はレバノン。
71 フィリップ　レバノン？
72 オリヴァー　でも主に惹かれるのは子供の本。
73 フィリップ　なぜだろう。
74 オリヴァー　わからない。思うに自由奔放にやりたいってことかな。
75 フィリップ　自由奔放？
76 オリヴァー　可能性が無限だから。大人の小説の決まりごとや因習にはとても大きな束縛を感じる。
77 フィリップ　そうなんだ。
78 オリヴァー　おしゃべりするトラや魔法の鏡の世界のほうがずっと楽しい。力を発揮できる。
79 フィリップ　なるほど。
80 オリヴァー　いつの日か大人の小説を書くことがあれば、想像力をもっと華やかに飛躍させることになるだろうけど、当面は十二歳未満の読者で満足だよ。
81 フィリップ　まあ、屋根のある場所には住んでるようだ。
82 オリヴァー　雨漏りはしても、どうにかなってる。
83 フィリップ　じゃ、とりあえず本に。
84 オリヴァー　本に。

二人は乾杯する。

85 フィリップ　不思議だ。
86 オリヴァー　何が？
87 フィリップ　ドアを開けたとき。
88 オリヴァー　何？
89 フィリップ　君に見覚えがある、ってことかな。
90 オリヴァー　ああ、僕もそう思った。
91 フィリップ　君も？
92 オリヴァー　うん、思った。
93 フィリップ　まあ、出くわしたことはあるかもしれない。地下鉄かどこかで。
94 オリヴァー　かもしれない。
95 フィリップ　不思議なことは起きるもんだ。

シルヴィア登場。夜の外出のために洗練された服装をしている。

96 フィリップ　お出ましだ。
97 シルヴィア　（オリヴァーに）訊問されてたんじゃない？
98 フィリップ　容赦なく。
99 オリヴァー　やあ、シルヴィア。
100 シルヴィア　男のくせにヤキモチ焼きなの。
101 フィリップ　猛烈に。
102 シルヴィア　すぐかっとなるの。フィリップ、お願い。

ドレスのいちばん上のホックを留めてもらおうと、フィリップに背を向ける。

103 シルヴィア　これでもたまには役に立つのよ。お酒は出したみたいね。
104 オリヴァー　完璧なおもてなしだよ。
105 シルヴィア　ならしつけたかいがあったわ。
106 フィリップ　飲み込みは早いんだ。ジン？

107 シルヴィア　お店の予約、八時よ。
108 フィリップ　軽く一杯。
109 シルヴィア　ありがとう、あなた。

フィリップはバーへ行き、彼女の分を注ぐ。

110 フィリップ　君がオリヴァーの話しかしないって言ってたところさ。
111 シルヴィア　わたしが恥をかくようなことは言ってないでしょうね、雇い主の前で？
112 フィリップ　どうかな。
113 シルヴィア　わたし、ちょっぴり緊張してたのよ。なぜかしら。
114 オリヴァー　緊張？
115 シルヴィア　二人が会うこと。
116 フィリップ　（オリヴァーに）だから先延ばしにしてたんだな？
117 オリヴァー　なるほどね。
118 シルヴィア　馬鹿みたい、ほんと。たぶん、気が合えばって思っただけ。
119 フィリップ　僕らはよろしくやってたよ。
120 シルヴィア　お互い好きになれば、ってね。
121 オリヴァー　そうならない理由はない。
122 フィリップ　君たちが僕に隠れて燃えるような情事にふけっていたことがバレないかぎり、大丈夫。
123 シルヴィア　言った通りでしょ、彼のユーモアのセンス。
124 フィリップ　ユーモアのセンス？
125 シルヴィア　その欠如、というべきね。
126 フィリップ　残酷だな。
127 シルヴィア　正直なだけ。

ややぎこちない間。フィリップはシルヴィアに飲みものを渡す。

128 シルヴィア　イタリア料理は好きかしら、オリヴァー。
129 フィリップ　すぐそこの小さな店を予約したんだ。
130 オリヴァー　いいね。
131 シルヴィア　フィリップはいつも馬鹿にするんだけど、わたしはチャーミングなお店だと思うの。
132 フィリップ　真っ赤っかなんだ。何もかも赤い。
133 オリヴァー　多少の赤は悪くない。
134 フィリップ　壁もテーブルクロスもウェイターの顔も。何もかも真っ赤。
135 シルヴィア　フィリップは、絶対にイタリア人じゃないって。
136 フィリップ　ユーゴスラヴィア人だよ。絶対ユーゴスラヴィア人。イタリア人のふりをしてる。
137 オリヴァー　興味深いね。
138 シルヴィア　料理はいけるの。
139 フィリップ　強いセルビア風味。
140 オリヴァー　それはおいしそうだ。

三人が座るわずかな間。

141 オリヴァー　すごくうれしいよ、ベリーフィンチをお宅のあちこちで見かけると聞いて。
142 シルヴィア　まだスケッチの段階だけど、もうすぐよ。
143 オリヴァー　待ち切れない。
144 シルヴィア　金曜までにもうすこし固まれば。いまは紫がちょっと強すぎて。

145 フィリップ　そのベリーフィンチとジャングルの話、気になるな。早く読んでみたい。
146 シルヴィア　まあ、辛抱してててくれないとね？
147 オリヴァー　あとすこし。
148 シルヴィア　あとすこし。それまでは、詮索禁止。
149 フィリップ　僕は悪くない。君があのぎょっとする絵を家じゅうに置きっぱなしにするからだろ。
150 オリヴァー　詮索好きなんだ？
151 シルヴィア　とってもたちが悪いの。
152 フィリップ　バスルーム。ソファー。冷蔵庫のなかまで。
153 オリヴァー　冷蔵庫？
154 シルヴィア　一度だけ。
155 フィリップ　あれはまいった。
156 シルヴィア　玄関のベルが鳴ってて。夕食つくってて。ちょっとうっかりしただけ。
157 フィリップ　君の物語が我が家を侵略したんだ。なのに僕が非難されてる。
158 オリヴァー　申しわけない、謝るよ。
159 フィリップ　ならば赦そう。

彼らは笑う。間。

160 フィリップ　僕は君たちがうらやましいんだよ。
161 オリヴァー　うらやましい？
162 シルヴィア　いったい何が？
163 フィリップ　いや、だから、君たちの仕事が。何かをつくるってことかな。生活のための仕事にそれなりの情熱を注げること。
164 オリヴァー　情熱でもない。孤独のほうが。
165 シルヴィア　フィリップは自分の仕事にとっても不満なの。そうでしょう？
166 フィリップ　僕は家を売ってるんだ、オリヴァー。
167 オリヴァー　言ってたね。
168 フィリップ　家やアパートを。
169 シルヴィア　これだけはわかってあげて、フィリップがいまの仕事に就いたのは事故のようなものなの。
170 オリヴァー　事故？
171 フィリップ　父が死んだんだ。
172 シルヴィア　フィリップがまだ二十一のとき。
173 フィリップ　僕は大学を出たばかり。
174 シルヴィア　お父さんは長年不動産売買の会社を経営してたの。フィリップのお兄さんが継ぐことになってた。
175 フィリップ　そう、兄はそうなるように仕込まれてた。父は兄を仕込んでた。僕は使えないやつだった。
176 シルヴィア　ふらふらしてたというか。
177 フィリップ　でもその二年後、ロジャーが――
178 シルヴィア　兄のね。
179 フィリップ　ロジャーが死んだの。
180 シルヴィア　事故でね。
181 フィリップ　自動車事故。ひどかった。
182 シルヴィア　僕は母を養わなきゃならなかった。
183 フィリップ　妹も。
184 シルヴィア　だから選択の余地がなかった。
たまに思うの、あなたはどうしてただろう。何になっていただろう。事情が違っていたらね。

フィリップ　さあ、僕にもわからない。移住してたかな。
オリヴァー　移住？
シルヴィア　フィリップはそういう突拍子もないことを考えるの、移住だなんて。
オリヴァー　興奮するね。
シルヴィア　オーストラリアとか、カナダとか、そういうところ。
フィリップ　新天地へ。
シルヴィア　覚えてる、アフリカへ引っ越すって考えに取り憑かれたこと？
フィリップ　アフリカ、うん。
シルヴィア　手当たり次第に本を読んでた。ケニアの本、ローデシアの本。うちじゅうに転がってた。
オリヴァー　アフリカは僕も行ってみたい。
フィリップ　ブライトンより遠くへ行ったことはないけどね、僕は。
シルヴィア　いつの日か。
オリヴァー　いつの日か。
フィリップ　そして目を覚ますと、客を空き家へ案内することに人生の大半を費やしてる。
シルヴィア　もっとさえない人生もあるわ。
フィリップ　そうかな？
オリヴァー　シルヴィアが正しいよ。
フィリップ　（やさしく）彼女はいつでも。

間。

フィリップ　でも君のほうは、オリヴァー、ブライトンよりも遠くへ行ってる。
オリヴァー　何カ所か。
シルヴィア　もう、謙遜しないで、ありとあらゆるところでしょう。
オリヴァー　そうでもないよ。
シルヴィア　オリヴァーはギリシャに住んでいたの。
フィリップ　ああ、さっき彼が……
シルヴィア　イタリアにも。ベイルートにも。シリアにも。
オリヴァー　世界のどこよりも親しみを感じる地域でね。
フィリップ　興奮するね。住んだことがあるなんて。
シルヴィア　オリヴァーはアテネを拠点にしていたの。
フィリップ　素晴らしい。
オリヴァー　アクロポリスのふもとの小さな家に住んでた。ネズミはいたけど、すごくチャーミングで。
シルヴィア　なんてロマンティック。
オリヴァー　キッチンの窓から首を出せば、パルテノン神殿がちらっと見える。
フィリップ　パルテノン神殿。
シルヴィア　フィリップとわたし、ギリシャまでドライブするのいつの日か、そうよね？
フィリップ　君がそう言うなら。
シルヴィア　フランスからイタリアへ抜けて、アドリア海を渡って。
フィリップ　いつの日か。
シルヴィア　それから島をめぐる。
オリヴァー　どの島もきれいだよ。
シルヴィア　フィリップ、わたし、『オデュッセイア』、チェスボード。
フィリップ　ジンも忘れずにね。
オリヴァー　ジンも忘れずに。
シルヴィア　いつの日か。

間が空いてしまう。シルヴィアがふと何かを思い出す。オリヴァーのほうを向く。

228 シルヴィア　話してあげて、デルポイのこと。
229 フィリップ　デルポイ？
230 シルヴィア　そう、デルポイ。あの話、デルポイであなたに起きたこと。
231 オリヴァー　ああ、あれ……
232 シルヴィア　デルポイの啓示。
233 フィリップ　デルポイの啓示？
234 シルヴィア　オリヴァーがとっても素晴らしい話を……
235 オリヴァー　大した話じゃない。
236 フィリップ　デルポイの啓示。
237 シルヴィア　素晴らしいのよ。
238 フィリップ　怪奇小説のタイトルみたいだ。『デルポイの啓示』。
239 オリヴァー　どうかな、フィリップは……
240 シルヴィア　このあいだ休憩中、オリヴァーがデルポイに行った話をしてくれたの。
241 オリヴァー　大した話じゃないよ。何ならまたいつか。
242 シルヴィア　そこでオリヴァーにあることが起きたの。神秘体験って呼んでもいいかしら？
243 フィリップ　いいね、ぜひとも。
244 オリヴァー　いや、ほんとうに……
245 フィリップ　頼むよ。
246 オリヴァー　そう興奮することでも興味深いことでもない。実際大した話じゃない。ただ不思議なことが起きただけで。
247 フィリップ　拝聴したいね。
248 オリヴァー　がっかりするよ、たぶん。
249 シルヴィア　もう、話して、オリヴァー。
250 オリヴァー　うん、デルポイは、ギリシャで最も訪ねてみたい場所、遺跡の一つだったんだ。
251 シルヴィア　神託。
252 オリヴァー　そこで僕はアテネからおんぼろの古いバスに何時間も揺られて、曲がりくねった山道を行った、たしか着くころには日が暮れかけていて、バスを降りると小さなホテルの真ん前。ホテル・ゼウスとかいう。外国人がほかにも何人かいた——アメリカ人の老夫婦、ドイツ人、イギリス人も何人か、そこに一人、耐えがたい女性がいてね、大きくて偉そうな声と自信満々な意見をもち合わせてる。
253 フィリップ　最高の組み合わせとは言えないね。
254 オリヴァー　みんなで軽い夕食を済ませて、すぐに寝た。
255 フィリップ　もう釘づけだよ。
256 オリヴァー　で、翌朝目を覚まして、よろい戸を開けると、もう……その眺めはまさに……
257 シルヴィア　息を呑む。
258 オリヴァー　まさに息を呑む眺めだった。つまり、どんな言葉でも足りない。表現のしようがない。行ってその目で見ないと。あれを信じるには。
259 フィリップ　いつの日か。
260 オリヴァー　景色がね、あの構図。実にうっとりする。とても、とても劇的で。山の高いところにいるから、峰を見上げれば雪が残っている、でも眼下を見渡せば、斜面に広がるオリーブの林が銀に輝いて、海が見える。
261 シルヴィア　なんて美しい。
262 オリヴァー　コリント湾の水面（みなも）が見える。そこには何か目を見張るものがあるんだ。つまり、真に、真に

美しいもの。するとわかってくる、なぜギリシャ人はそこを神託を聞く場所に選んだか。たぶんこれほど美しく静かな場所なら何かの訪れを感じられる。自分の時間から連れ出してもらえる、時間のそとへ。より大きな絵が見える、というか。

263 フィリップ　それでおしまい？君の啓示は？

264 オリヴァー　まだこれからだよ。

265 シルヴィア　もう、フィリップ、聞いてあげて。

266 オリヴァー　で、朝食のあと、古代劇場や神託所跡のほうへ行ったんだけれど、アメリカ人の老夫婦もついてきた。たぶん僕を学者か何かだと思ったんだろう。質問してきてはがっかりするんだ、僕の答えが思ったほど詳しくないものだから。

267 シルヴィア　たしかにそう見える。特に眼鏡をかけてると。

268 オリヴァー　結局、厄介払いできたけどね。どこかでいなくなって、一人で回ることができた。すこしほっとしたね。

269 フィリップ　そりゃそうだ。霊的体験を味わうのに、アメリカの観光客が至近距離にいたら困るだろう。

270 オリヴァー　とにかく遺跡のなかをぶらついてみた。一人っきりで、それはもう、とても静か。聞こえてくるのはセミがじりじり鳴く声だけ。そよ風が木々を揺らす音も。歩きながらちょっと放心してきた、本当に。

271 フィリップ　いよいよ啓示の訪れか。

272 オリヴァー　そこで聞こえたんだ。

273 フィリップ　それきた。

274 オリヴァー　たぶんそれは声としか言いようがない。普通の意味での声じゃない。即座に声とわかるものではなかった。

275 フィリップ　まさか例のアメリカ人の声とか？

276 シルヴィア　もう、フィリップ、静かに。

277 フィリップ　どうせ豚に真珠。

278 オリヴァー　じっと立っていたら声が聞こえた。その声はこんなことを――何も心配はいらないって。

279 フィリップ　心配はいらない？何が心配いらないって？

280 オリヴァー　うん、いつの日か、何年も何年も先のことかもしれないけれど、いくつかのことがらが理解されるようになる、僕らに具わったいくつかの側面についてもっと深く理解される、いま僕らが感じる困難も、いま僕らがしがみつく恐怖も、いま僕らが眠れない夜も、無駄ではなかったと思える日が来る……その時代を生きる人々は、五十年先、五百年先かもしれないけれど、その理解のおかげで幸せになってる、賢くなってる。より善き人間に。

281 シルヴィア　素晴らしくチェーホフ的。

282 オリヴァー　しかもなんだかその声は、まさにその未来から届くような気がした。いわば、未来の目覚めた僕らから。これでおしまい。これが僕の啓示。

283 シルヴィア　人の心に何かを残す場所ってあるわ。人の心に触れる場所。

284 フィリップ　たしかに、わかるよ。想像つかないからね、この近所でそんなふうに開眼するなんて。

285 オリヴァー　ナイツブリッジならまだしも、ピムリコではね。

286 フィリップ　だけど教えてほしかったな、今晩ディナーするお相手がしょっちゅうお告げを聞く男だって。もっと覚悟しておいたのに。

287 シルヴィア　もう、フィリップ、失礼よ。

288 オリヴァー　本当に恥ずかしくなってきた。

289 シルヴィア　そんな、いいの。ふざけてるだけよ。

三人笑い、そして間がある。

290 シルヴィア　そろそろ行かないと。

291 オリヴァー　うん。
292 フィリップ　ユーゴスラヴィア人を怒らせたら大変だ。
293 シルヴィア　もうやめて。カーディガン取ってこなきゃ。すぐ戻る。
294 フィリップ　二人きりにされちゃ困る。間がもたないよ。
295 シルヴィア　そんなことないでしょ。
296 フィリップ　まあ、とにかく急いだ。
297 シルヴィア　わかった、わかった、いじめないで。
298 フィリップ　急いで。

シルヴィアが部屋を出ると、男二人が残される。間が空いてしまい、そして二人同時に話そうとする。

299 フィリップ　でも本当に……
300 オリヴァー　何かすごく……
301 フィリップ　お先に。
302 オリヴァー　いや、どうぞ……
303 フィリップ　うん、本当にね、この仕事、シルヴィアにはすごく大切なんだ。すごく楽しんでるよ、君との仕事を。
304 オリヴァー　僕にとってもすごく大切だよ。
305 フィリップ　一つの企画にこれほど打ち込んだことはなかったと思う。しかもこれほど恵まれたタイミングで。
306 オリヴァー　タイミング？
307 フィリップ　彼女には必要だった、いろいろあったあとだったから。
308 オリヴァー　体調がよくなかったとは言っていたけど。
309 フィリップ　うん。

ぎこちない間。

310 フィリップ　昔女優だったのは知ってるだろう？
311 オリヴァー　彼女から聞いた。
312 フィリップ　挿絵画家を始める前。
313 オリヴァー　うん。
314 フィリップ　二、三年だけど。
315 オリヴァー　舞台の彼女を見てみたかった。
316 フィリップ　でもやめることにした。彼女いわく、二人のために。
317 オリヴァー　そう。
318 フィリップ　でもある意味こわくなったんだろう。
319 オリヴァー　こわくなった？
320 フィリップ　抜群だったんだ。おそろしいくらい、本当にうまかった。人物になりきる。その人の人生に入り込むんだ、どっぷりと。あの想像力だから。
321 オリヴァー　すごくよかったろうね。
322 フィリップ　でもやっぱり、ああいう世界は……
323 オリヴァー　演劇の？
324 フィリップ　得意じゃなかったんだ。きっと。
325 オリヴァー　そうなの？
326 フィリップ　でも本当にうまかった。本能、かな、直感。そして共感する力。そういう資質。
327 オリヴァー　たしかに。

328 フィリップ　でも賢明だったよ。
329 オリヴァー　賢明？
330 フィリップ　やめたのはね。
331 オリヴァー　そう？
332 フィリップ　繊細だから。

間が空いてしまう。

333 フィリップ　眠れない夜があるんだ、君には？
334 オリヴァー　失礼？
335 フィリップ　さっき言ってたね。話の中で。神託の。たしかこう言ってた、いくつかのことがらが理解されるようになる、いま僕らが眠れない夜も無駄ではなかったと思える日が来るって。
336 オリヴァー　あぁ。
337 フィリップ　だからよくあるのかなって。眠れない夜が。
338 オリヴァー　たまにね。
339 フィリップ　あのベリーフィンチどもが脳内を漂ってるんだな。
340 オリヴァー　かもね。

長い間。何かが起きたのである。そこへシルヴィアが登場する。

341 シルヴィア　お待たせ。
342 フィリップ　そろそろだ。
343 オリヴァー　素敵だよ。
344 シルヴィア　ありがとう、オリヴァー。

フィリップが明かりを消していく。

345 シルヴィア　わたし考えていたの。
346 フィリップ　何を？
347 シルヴィア　とっても大事な夜になるって。
348 フィリップ　そうかな？
349 シルヴィア　わたしにとって。わたしたち三人にとって。
350 フィリップ　どうして？
351 シルヴィア　さあ、わからない。
352 フィリップ　鍵は持った？
353 シルヴィア　ええ。
354 フィリップ　じゃ行こう。

三人はドアのほうへ行く。と同時に、一人の男が登場する。男はナチスの制服を着ている。三人には見えないが、登場とともに、彼らのそばをかすめて通る。

355 シルヴィア　いまの何？
356 フィリップ　何って何が？
357 シルヴィア　何か……何か感じたの。
358 フィリップ　何を？

男は部屋の中央へ行き、そこに静かに立つ。

359 シルヴィア　何でもない。
360 フィリップ　コート忘れないで。
361 オリヴァー　あったかくはないよ。

シルヴィアはコートを取る。三人はドアを開け、出ていこうとする。

362 フィリップ　で、どうして大事な夜になるの？
363 シルヴィア　気にしないで。声に出して考えただけ。
364 オリヴァー　よくそうするんだ？
365 シルヴィア　それだけ。
366 フィリップ　変人なんだ。
367 オリヴァー　そうなの？
368 シルヴィア　意地悪はやめて。
369 フィリップ　変人なんだ。

三人はドアを閉めて去る。ゆっくりと場面転換が、それとはわからないよう、薄明かりのなか行なわれる。何か音楽を用いてもよいだろう――一九五〇年代の芝居の場面転換で使われるようなもの――ソフトでエレガントなもの。部屋に二、三の変化がある――巨大な現代風の写真をかけてもよいし、プラズマスクリーンを置いてもよい――そうして五〇年代風レトロスタイルに装飾された現代のアパートとなってもよい。ただし、基本的には同じ部屋であり、変化は表面的な、装飾的なものである。五〇年代の音楽がいつの間にか新しいもの、やかましいもの、おそらく激しいものに変わっていく。そのあいだナチスの制服の男は部屋の中央に立ったまま、身動きせずに黙っている。

第2場　二〇〇八年

まだ薄暗いうちにオリヴァーが登場するが、今度は下着姿である。ガウンを引きずっている。部屋のどこかの床に座る。そばに男が立ちはだかり、オリヴァーを見下ろしている。照明が戻り、音楽が打ち切られる。男は最初のいくつかの台詞をドイツ訛りで話す。

1 男　顔上げんじゃねー、メスブタ。
2 オリヴァー　すみません。すみません。
3 男　上げんなって。
4 オリヴァー　すみません。
5 男　絶対上げんじゃねーぞ、クズのメスブタ。お前は何だ？
6 オリヴァー　僕は何だ？
7 男　お前は何だ？自分が何だか言ってみろ！
8 オリヴァー　僕は何か。
9 男　何だか言ってみろクソったれ、この変態のメスブタ。
10 オリヴァー　自分はド変態のメスブタです。
11 男　よぉし、その調子だ。さあ、俺のブーツなめろ。

オリヴァーは身を乗り出し、男のブーツをなめようとするが、やめてしまう。

12 オリヴァー　オッケー、ごめん、もういいよ。
13 男　黙ってなめろ。
14 オリヴァー　いやマジで、やめてくれる。お願い。タイム。ストップ。アブラカダブラ。
15 男　アブラカダブラ？
16 オリヴァー　そう。お願い。ストップ。アブラカダブラ。ほんとにアブラカダブラ。
17 男　（本来の案外キャンプなロンドン訛りで）お金は払ってよ。
18 オリヴァー　うん。
19 男　だってここまで来んのに二時間かかったんだよ。アールズコートから。
20 オリヴァー　うん。地下鉄。立ち往生したって。さっき聞いた。
21 男　濡れたし。びしょびしょに。
22 オリヴァー　ごめん。
23 男　びしょ濡れだよ。
24 オリヴァー　うん。
25 男　お金払ってよ。
26 オリヴァー　もちろん。もちろん払う。
27 男　遠いとこ来たんだから。
28 オリヴァー　わかってる。

間。

29 オリヴァー　ちょっと気分じゃなくて。電話しなきゃよかった。退屈してて。
30 男　あっそ。
31 オリヴァー　ちょっとさみしくて。
32 男　みんなそうでしょ。
33 オリヴァー　ちょっと酔ってたのかも。

34 男　わかったよ。

間。

35 オリヴァー　一杯いっしょにどう。
36 男　お金払うよね。
37 オリヴァー　せっかくだし。
38 男　まだザーザー降りか。
39 オリヴァー　スコッチでも。
40 男　まあ、だったら。

オリヴァーはスコッチを注いでやり、グラスを渡す。二人はしばらく黙ったまま座り、雨音を聞く。

41 オリヴァー　超うまかったよ。迫真ってゆーか。
42 男　あぁ。
43 オリヴァー　言葉責めから何から。
44 男　ありがと。
45 オリヴァー　どういたしまして。

間。

46 オリヴァー　写真もイケてる。ネットの。
47 男　よく言われる。
48 オリヴァー　あのジャーマン・シェパード飼ってるの？
49 男　お姉ちゃんの。
50 オリヴァー　連れてきたらどうしようって。
51 男　ああ。
52 オリヴァー　効果はあったけど。

間。

53 オリヴァー　役者さん？
54 男　だった。
55 オリヴァー　やっぱり。
56 男　いまいち食ってけなくて。
57 オリヴァー　舞台の？
58 男　だいたいは。あちこちで。ノーサンプトン。ブリストル。イプスウィッチ。
59 オリヴァー　地方ね。
60 男　コマーシャルも一回やった。ドッグフードの。ぼろ儲け。
61 オリヴァー　どうりで見覚えが。
62 男　あと変な吹き替え。
63 オリヴァー　苦労するね。
64 男　余計なお世話。

間。

65 オリヴァー　で、いまは何を？
66 男　あぁ、うん。いろいろかじってる。これでしょ、まず。
67 オリヴァー　そうね。
68 男　週二で花屋の手伝い。
69 オリヴァー　いいね。
70 男　演技指導。
71 オリヴァー　すごい。
72 男　そんな感じ。
73 オリヴァー　へー。

間。

74 オリヴァー　彼氏にふられちゃってね。
75 男　あっそ。
76 オリヴァー　今年三回目。
77 男　ふるのくせになってんじゃない、そいつ？
78 オリヴァー　今回はマジ。レコード持ってった。
79 男　つき合ってどれくらい？
80 オリヴァー　一年半。
81 男　寿命でしょ。
82 オリヴァー　やっぱり？
83 男　僕なんか、せいぜいもって八ヶ月。
84 オリヴァー　そうなの？
85 男　うん。

間。

86 男　去年エクアドルのやつとつき合ってさ。結婚しようって言われて。デカマラ、僕の腕ぐらい。
87 オリヴァー　最高じゃん。
88 男　あんなの見たことないよ。
89 オリヴァー　僕、ある。
90 男　でもキモくてさ。
91 オリヴァー　キモい？
92 男　僕の体にウンコしたがって。いきなりだよ。「お前の体にクソしてーよって」。人っていろいろ。
93 オリヴァー　変わってる。
94 男　変態すぎ。

間。

95 男　じゃ、彼氏にふられて悲しいんだ？
96 オリヴァー　うん。だね、そう思う。
97 男　そっか。

間。

98 男　やめて。

間。

99 オリヴァー　三日目だよ。

100 男　三日目？

101 オリヴァー　ふられてから。

102 男　あぁ。

103 オリヴァー　それからどこにも出かけてない。

104 男　そう。

105 オリヴァー　引きこもり。いろいろ考えちゃって。

106 男　吹っ切れるよ。

107 オリヴァー　どうかな。

108 男　吹っ切れるもんだよ、何事も。

109 オリヴァー　食べるものなくなった。テスコ行かなきゃ。

110 男　飢え死にしちゃうよ。

111 オリヴァー　ほんと。

112 男　吹っ切れるって。

113 オリヴァー　どうかな？

間。

114 男　で、何で生活してんの？

115 オリヴァー　ジャーナリスト。もの書き。

116 男　いいじゃん。

117 オリヴァー　そう？

118 男　堅気でしょ。僕とはちがう。

119 オリヴァー　自分でそう言うなら。

120 男　コスプレとはちがう。

121 オリヴァー　フリーランスだよ。書いてんのはデイリー・メールばっか。

122 男　食ってくためでしょ。

123 オリヴァー　うん。新しい雑誌の仕事始めるとこだけど。

間。

玄関の向こうで鍵の音がする。ドアがひらく。フィリップ登場。オリヴァーと男を見ると驚いた様子。オリヴァーは急に立ち上がる。

124 フィリップ　ざけんなよ。

125 オリヴァー　ヤバ。

126 フィリップ　マジでふざけんなよ。

127 オリヴァー　これはべつに……

128 フィリップ　俺はてっきり……

129 オリヴァー　やべっすねー。

間。

130 フィリップ　グラスゴー行ってるって思ってた。

131 オリヴァー　キャンセルした。

132 フィリップ　グラスゴー行くって言ったよね。
133 オリヴァー　まだ鍵持ってたんだ。
134 フィリップ　ここにはいないって言うから。
135 オリヴァー　鍵は置いてったもんだと。
136 フィリップ　荷物取りにきたんだ。最後のスーツケース。
137 オリヴァー　そう。
138 フィリップ　本の。
139 オリヴァー　うん。

オリヴァーはフィリップが男を見ているのに気づく。フィリップは制服をじっと見ている。

140 オリヴァー　こちらは……
141 フィリップ　いい。すぐ行く。
142 オリヴァー　ゆっくりどうぞ。
143 フィリップ　ベッドルームにある。
144 オリヴァー　うん。ベッドの脇。
145 フィリップ　すぐ終わる。
146 オリヴァー　オッケ。

フィリップは一瞬行き先に迷い、早足で部屋を出てベッドルームに入る。

147 オリヴァー　ヤベ。ヤベ、ヤベ、ヤベ、ヤベ、ヤベ。お願い、帰って。
148 男　はぁ？
149 オリヴァー　もう帰って。お願い。帰って。
150 男　飲み始めたとこだよ。
151 オリヴァー　お願い帰って。
152 男　お金もらってないよ。
153 オリヴァー　うん。
154 男　もらうまで動かないから。

オリヴァーはあわてて財布を取りにいき、二十ポンド紙幣を数枚取り出す。

155 オリヴァー　はい。おつりはいい。帰って。
156 男　（金を数え）これ脱がなきゃ。
157 オリヴァー　だめ。行かなきゃだめ。一大事なの。
158 男　ナチスの格好で地下鉄乗れないよ。
159 オリヴァー　勝手にして。いいから急いで。お願い。

男は自分のバッグを取ってバスルームへ向かい、振り返る。

160 男　あいつ、よりは戻さないね。
161 オリヴァー　さっさと着替えろって。

男は退場。フィリップが小ぶりのスーツケースを運んで出てくる。

162 フィリップ　終わり。

163 オリヴァー　よかった。
164 フィリップ　行くよ。
165 オリヴァー　だめ。

間。

166 オリヴァー　お願い。待って。一分だけ。一杯。それだけ。絶対。
167 フィリップ　どうかな。
168 オリヴァー　お願い。
169 フィリップ　相手いるじゃん。
170 オリヴァー　ああ、あれ。
171 フィリップ　そう。
172 オリヴァー　あれはただの……単なる……
173 フィリップ　弁解はいい。
174 オリヴァー　ニックの友達。コスプレ。コスプレパーティー。ニックの家に行くんだって。一杯飲んだの。それだけ。帰るとこ。
175 フィリップ　ニックはいまブラジルだ。
176 オリヴァー　もちろんだよ。知ってる。
177 フィリップ　ふざけんなよ。
178 オリヴァー　ニックはいまブラジルだよねー。
179 フィリップ　ふざけんなよ、オリヴァー。
180 オリヴァー　はい。

間。

181 オリヴァー　お願い。お願いもうちょっといて。十五分。それだけ。

間。

182 フィリップ　あいつ。
183 オリヴァー　うん。
184 フィリップ　ナチスの制服着てる。
185 オリヴァー　うん。キモいよね？
186 フィリップ　どこまでエスカレートするんだよ。自分にあきれないわけ？
187 オリヴァー　うん。あきれる。あきれます。

間。

188 オリヴァー　お願いいて。
189 フィリップ　いたくない。
190 オリヴァー　お願い。

間。

191 オリヴァー　クローゼットがすかすかに見えちゃって。
192 フィリップ　はぁ？
193 オリヴァー　だから、気づかなかったってこと、服あんなにたくさん持ってたんだって。

194 フィリップ　あぁ。
195 オリヴァー　いきなりすかすかに。

間。

196 オリヴァー　元気そうね。
197 フィリップ　変わってない。
198 オリヴァー　だね。
199 フィリップ　まだ三日だよ、オリヴァー。三日じゃ人は変わらない。
200 オリヴァー　もっと長かったみたい。ちがって見えるよ。
201 フィリップ　そう。
202 オリヴァー　もう僕のものじゃないみたい。

間。

203 オリヴァー　つまりね、フィリップ、君なしで生きていく自信がなくて。

男がバスルームから戻ってくる。自分の服を着て、バッグを持っている。

204 男　まだザーザー降り。
205 オリヴァー　あっそ。

男はテーブルへ行き、飲みかけのスコッチを飲み干す。オリヴァーとフィリップは彼を見守る。

206 男　きらいじゃないんだ、この仕事。おもしろい人間と出会えるし。すごくいろんな人間と。サラリーマンとか絶対向かないし。何時間もコンピューターとにらめっこなんて。地下鉄乗って、ロンドンじゅうを回るのもきらいじゃない、ザーザー降りで歩き回るのも。でもささやかでいいからリスペクトを持って接してもらいたいよね。

玄関へ歩く。

207 男　大した頼みじゃないでしょ？ 普通のことだよね。つまりさ。僕は家具でもぜんまい仕掛けの人形でもない。僕は人間なの。人間らしく接してもらって当然でしょ。ゴミみたいに捨てるのはなしだよ。客のお楽しみのためにコスプレするのはいいけど、僕にも感情はあるんだよ、って言ってるわけ。（フィリップに）会えてよかった。

出ていく。間。雨音だけ。

208 オリヴァー　人っていろいろ。
209 フィリップ　行かなきゃ。

オリヴァーはあわててスコッチのボトルを取りにいく。フィリップの分を一杯注ぐ。

210 オリヴァー　一杯だけ。

フィリップは仕方なくグラスを受け取る。

211 オリヴァー　座って。五分。そしたら行って。

二人は座る。間。

212 オリヴァー　今朝シルヴィアと電話で話してね。慰めてくれた。ありがたい。
213 フィリップ　元気なの？
214 オリヴァー　シルヴィア？うん、シルヴィアは元気。「土曜日に寄るね、マリオといっしょに。」って。プライド行こうよ。楽しもう。」って。
215 フィリップ　プライド？
216 オリヴァー　土曜日のゲイ・プライド。僕は……「気が向くかわからない」って言った。「フィリップは出てった。もしかしたら……戻ってこないかも」って。
217 フィリップ　戻らないよ、オリヴァー。
218 オリヴァー　だからそう言った。「ねぇシルヴィア、たぶんフィリップは戻ってこないよ」って。「でもさ、引きこもっててもしょうがないよ」って、シルヴィアが。「いじけてんじゃないよ。連れ出してあげる。そとへ。元気づけてあげる」って。
219 フィリップ　何て答えたの？
220 オリヴァー　オカマだらけの公園に行っても、大して元気にはなれないよって。

間。

221 オリヴァー　あいつのことは好きじゃないよ、フィリップ。こないだのアメリカ人。愛してない。
222 フィリップ　その話はしたくない。
223 オリヴァー　あれは愛じゃない。君のことは愛してる。
224 フィリップ　もう行く。
225 オリヴァー　だめ。

間。

226 オリヴァー　オッケー。こういうことなんだ。自分でもわからないことがあって。わかりたいけど、わからない。何かが僕のなかにある、ってゆーか。僕のＤＮＡのなかに。
227 フィリップ　なんなんだよ。
228 オリヴァー　君の場合はちがう。君の場合は愛なんだ。
229 フィリップ　俺にうそをついた。
230 オリヴァー　さっきのは何でもない。べつのもの。わかるでしょ。
231 フィリップ　じゃあなんでやるんだよ？
232 オリヴァー　必要だから。
233 フィリップ　俺にうそをついた。
234 オリヴァー　わかってる。
235 フィリップ　何度も何度も。
236 オリヴァー　うん。
237 フィリップ　うそばっかついて。うそで固めた一年半。
238 オリヴァー　出会ったときのこと覚えてる？
239 フィリップ　もう君って人間がわかんない。
240 オリヴァー　あのパーティーで。
241 フィリップ　君って人間が全然わかんない。
242 オリヴァー　シルヴィアのパーティーで。
243 フィリップ　決まってんだろ、覚えてるよ。

244 オリヴァー　シルヴィアは僕たち気が合うってわかってた。お互い好きになるって。「写真家さんがいてね。」って言われて。「いつも旅してるの。きっと気に入るよ」って。

245 フィリップ　もう行かないと。

246 オリヴァー　君はイスラエルから戻ったとこで。

247 フィリップ　ヨルダン川西岸。

248 オリヴァー　そう……

249 フィリップ　で？

250 オリヴァー　で僕たちしゃべった。その旅行のこと。撮ってきた写真のこと。

251 フィリップ　なんでいまその話になるんだよ？

252 オリヴァー　どうなったのかなって、あの女性。

253 フィリップ　どの女性？

254 オリヴァー　そのとき話してた人。写真に撮った人。パレスチナの女性。

255 フィリップ　オリヴァー。

256 オリヴァー　一時間は語ってくれた。あんなに黒い瞳は見たことない、あんなに何かを求めてる瞳はって。

257 フィリップ　一体何なんだよ。

258 オリヴァー　その人の息子が死んだんだって。

259 フィリップ　何だってその話になるんだよ？

260 オリヴァー　僕訊いたでしょ、その瞳は何を求めてたのかって。

261 フィリップ　で？

262 オリヴァー　そしたら君は、尊厳だよって、つまり聞いてもらうこと。返事は求めてない。ただ聞いてもらうこと。聞いてもらうことで生まれる尊厳。声をもつ権利。

263 フィリップ　なんなんだよ。

264 オリヴァー　あのときだよ、君のなかの何かに気づいたのは。

間。

265 フィリップ　帰る。

266 オリヴァー　君とのつながりを感じた。あそこで。パーティーで。そのあとここでも、二人で帰ってきたとき。それにいまも、いまも感じる。いまも感じるんだよ、フィリップ。

間。

267 オリヴァー　そういうの、めったにないと思う。

268 フィリップ　君はあばずれだ、オリヴァー。頭悪すぎるあばずれだ。

269 オリヴァー　ありがとうございます。

270 フィリップ　どういたしまして。

間。

271 フィリップ　出会ってたったひと月半、もうほかのやつとヤッてた。

272 オリヴァー　わかってる。

273 フィリップ　俺はブリュッセルにいた。その前の晩はいっしょにいた。あのベッドで。君は言ってた、こんなにも誰かを愛したことはないって。それから駅まで車で送ってくれた。

274 オリヴァー　わかってる。

275 フィリップ　その八時間後？とか、十時間後には、べつの男のチンコしゃぶってた。

276 オリヴァー　わかってる。

277 フィリップ　それって何なんだよ、オリヴァー？何なんだよ？

278 オリヴァー　わかんない。
279 フィリップ　ごていねいに話してくれてさ。「僕こんなことしちゃった。なんでかわかんないけど、こんなことしちゃった」って。
280 オリヴァー　話した。
281 フィリップ　「男のチンコしゃぶっちゃったよ。公園で。」って。
282 オリヴァー　話した。
283 フィリップ　「相手はほとんど見えなかった」って。だから何だよ？「顔はほとんど見えなかった。」
284 オリヴァー　真っ暗だったから。
285 フィリップ　「顔はほとんど見えなかった。」そう言えば気休めになるとでも思った？

間。

286 フィリップ　でも俺はね、それで落ち込むんだよ。そう。そういうこと。だからもうつき合えない。落ち込むんだよ。
287 オリヴァー　落ち込む？
288 フィリップ　考えてはみたよ。俺がおかしいのかもしれないと思った。俺がお堅すぎるんだろ。潔癖で。わかんない。出家でもしたほうがいいんだよな。相手の顔は見えなかったんだ、何度も考えた。しゃぶったかもしれない、だけど……
289 オリヴァー　フィリップ――
290 フィリップ　しゃぶったかもしれない、だけど、顔は見えなかったんだから。たぶん問題は俺にあるんだよな。オリヴァーはデートしてるんじゃない、いちゃついてるわけでも、相手とバカンスに行こうとしてるわけでもない、公園でしゃぶり合ってるだけ。だけど俺はヤなんだよ。
291 オリヴァー　君の問題じゃないよ。
292 フィリップ　どうせ男どうしだもんな、って考えた。みんな言うよね？ 男どうしだからだ。ゲイだからじゃない。男だから。男だからしょうがない。
293 オリヴァー　たしかにみんな言うね。
294 フィリップ　だけど俺には自分の感情しかわからない。あの晩ブリュッセルから戻ったとき、話聞かされたあと、ベッドに寝転んで天井見てた。あんな孤独を感じたのは生まれてはじめてだったよ。ごめん。
295 オリヴァー

間。

296 オリヴァー　シルヴィア、あの仕事取ったって。
297 フィリップ　何の仕事？
298 オリヴァー　応募した仕事。シェイクスピアの。チャンスだって言ってた。主役。ヴァイオラ。『十二夜』の。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで。
299 フィリップ　さすがだね。
300 オリヴァー　それからマリオ。イタリア人の彼氏。いい感じみたい。ラブラブなんだ。ちゃんとした男だって。しかもすごく、ものすごくストレート。
301 フィリップ　よかった。

間。

302 オリヴァー　自分でもどういうことかわからなくて、フィリップ。何か、僕の名前が。何となく誰かが僕を名前で呼んでる気がする。
303 フィリップ　いったい何言ってんの？
304 オリヴァー　その名前に反応しちゃうんだ。こないだの夜みたいに。僕、角のゲイバーの前を歩いてて。

305 フィリップ　ああそう。

306 オリヴァー　あの店の前を歩いてて考えてた、帰んなきゃ、仕事しなきゃ。デイリー・メールの記事書かなきゃ、なんだろ。世界の終わりは近いとか、それ系のこととか。そしたら声がして、僕の名前を呼んでるみたいで。

307 フィリップ　名前？

308 オリヴァー　その声は、僕の名前を知ってるみたいで。だから僕はなかに入った。だってその声が僕の名前を呼んでるから。二杯飲んだ。そしたら一人、男がいて……ハンサムでも何でもない。実際、思い出してみると、激しくブスなほうだった。ビールくさいし。二メートル離れてもにおってくる。口臭がぶわーっと。しかも変な目つきでこっちを見てる、僕の名前を知ってるみたいに。ちょっと酔っててなめるような目つき……ほんとなめるような、うわー、マジキモいって思ったつぎの瞬間、僕となりに立って話を聞いてる、結婚してるとか、奥さんは一週間実家に帰ってるとか、でなんかそいつ、僕に話しながら自分の股間揉んでて……

309 フィリップ　最後まで聞きたいとは思わない。

310 オリヴァー　気づいたら二人でトイレの個室にいた。僕はしゃがんでた。

間。

311 フィリップ　ごちそうさま。

312 オリヴァー　中毒だ、って言おうとしてる。

313 フィリップ　中毒。

間。

314 オリヴァー　まだ一度も話してないことがあって。

315 フィリップ　やっぱり真実は出し惜しみしてほしい。

316 オリヴァー　もっと若いころに起きたこと。昔、たしか十七歳かそれぐらい、おばさんの家に泊まってたとき。お母さんのお姉さん。君も会ったでしょ。

317 フィリップ　ああ。

318 オリヴァー　女の人がやってきて。おばさんの友達の。僕は出かけるとこだった。おばさんからその人紹介されて、はじめましてとか言って、走って出かけた。でもすぐ忘れものに気がついて。セーターかなんか。走って家のなかに戻ったところで気がついた、二人が――おばさんとその友達が――僕の話をしてたんだ。僕が戻った音には気づいてない。僕、耳を澄ましてみた。全部は聞こえないんだけど――けど、おばさんの声が聞こえてきて、「あの子、いい子だけどちょっとずれててね。」実際にはこんなようなことじゃない。一字一句いまのとおり。「あの子、いい子だけどちょっとずれててね。」しかも変なのは――いちばん変なのは――言う前から何となくわかったのね、おばさんの言おうとしてること、前にもおばさんがその言葉を口にしたみたいな、おばさんがそれを言ったのとそれを言うってわかったのが結びついてるってゆーか。同時に起きた。「あの子、いい子だけどちょっとずれててね。」

間。

319 フィリップ　行かないと。

320 オリヴァー　うん。

321 フィリップ　もういられない。

322 オリヴァー　うん。そうだね。

323 フィリップ　君のこと、これからも大切に思ってる。

324 オリヴァー　ありがとう。

325 フィリップ　でもその部分は……君がその、中毒って言ってる部分は。俺には無理。
326 オリヴァー　うん。

間。

327 フィリップ　じゃあ。
328 オリヴァー　うん。だね。じゃあ。

間。フィリップは立ち上がる。スーツケースを持つ。

329 フィリップ　ごめん。本当に。
330 オリヴァー　行かないで。
331 フィリップ　行かないと。

フィリップは玄関へ向かう。立ち止まり、オリヴァーのほうを向く。

332 フィリップ　いまだにわかんない、どうしてここまで引き延ばしてきたのか。ここに来る途中もずっと考えてた。知らなかったわけでもないのに。なのにずっと……ずっと俺は頑張った。何かを信じてた。君を。わかんない。信じてた。君をわかってるつもりになってた、ってことだと思う。

フィリップ出ていく。オリヴァーは一人、部屋に残される。立ち上がってスコッチのところへ行き、自分の分を一杯注ぐ。そしてふと動作を止める。何か身ぶり――片手を頭へやったり、首を垂れたり――孤独を表わす身ぶりである。
照明のスイッチの一つへ行き、明かりを消す。薄明かりのなか、ベッドルームへ通じるドアからシルヴィアが現われる。ガウンを着ている。部屋は前の場の状態に戻る。オリヴァーはゆっくり静かに去り、シルヴィアの出てきた部屋に入る。

第3場　一九五八年

シルヴィアがやってきて、ソファに座る。数秒後にフィリップが登場する。彼もまたパジャマとガウンを着ている。

1 フィリップ　ここにいたんだ。
2 シルヴィア　あなた。
3 フィリップ　目を覚ますと。となりにいないから。
4 シルヴィア　夢を見たの。
5 フィリップ　また気色の悪い夢？
6 シルヴィア　そう。
7 フィリップ　セルビア料理が並んでる。
8 シルヴィア　たぶんね。

フィリップは彼女のとなりに腰かける。二人は数秒、黙ったまま座っている。

9 シルヴィア　今夜は楽しかった？
10 フィリップ　実に楽しい夜だった。
11 シルヴィア　本当に？
12 フィリップ　ちょっと酔っ払った、あのひどいワインのせいだな。
13 シルヴィア　三人ともよ。
14 フィリップ　でも申し分のない夜だった。

間。

15 シルヴィア　あなた無口だったわね。
16 フィリップ　僕が？
17 シルヴィア　はじめはちがった。食事が始まったときは。
18 フィリップ　僕はべつに――
19 シルヴィア　それまでおしゃべりだったもの。上機嫌で。でも食事中に無口になった。
20 フィリップ　無口だと思ったなら、謝るよ。
21 シルヴィア　そうじゃないの。責めてるんじゃない。ただの観察。
22 フィリップ　観察？
23 シルヴィア　大したことじゃないの……ちょっぴりふさいでるような気がしただけ。憂鬱そうな。
24 フィリップ　それは大げさだな。
25 シルヴィア　気になることでもあるのかしらって。
26 フィリップ　聞いてただけだよ。出る幕じゃないような気がしてね、でも僕のせいで白けたのなら謝るよ。
27 シルヴィア　そんなんじゃないの。
28 フィリップ　そう。
29 シルヴィア　何も言わなきゃよかった。

間。

30 シルヴィア　じゃあ気に入ったのね、彼のこと？
31 フィリップ　誰のこと？
32 シルヴィア　オリヴァーよ、もちろん。
33 フィリップ　いいやつみたいだ。

34 シルヴィア　実際そうでしょう？
35 フィリップ　お互い共通点が多いかどうかは疑問だけど、ごくまともな男だよ。
36 シルヴィア　なぜそんなことを言うの？
37 フィリップ　ごくまともな男ってこと？
38 シルヴィア　違う、なぜあまり共通点がないなんて言うの？
39 フィリップ　ないから。それはまあはっきりしてた。
40 シルヴィア　気が合うと思ったのに。
41 フィリップ　だってしょうがないだろう？ 相手は作家だし。とても知的で外向的、そうだろう？
42 シルヴィア　じゃ何、あなたは……
43 フィリップ　まあ、似ても似つかない。芸術的センスのかけらもない。
44 シルヴィア　そうかしら。
45 フィリップ　とにかく、僕が彼をどう思おうといいだろう？ 要は君たちが意気投合すればいい、大切なのはそれだけだ。
46 シルヴィア　わたし、二人に仲よくなってほしくて。
47 フィリップ　それに仕事も、もちろん。大事だよ。
48 シルヴィア　ええ。
49 フィリップ　君たちは、仕事について言えば、ちゃんとお互いを理解し合ってるらしい、それが肝心だ。
50 シルヴィア　そうね。
51 フィリップ　だから僕が彼をどう思おうと関係ない。
52 シルヴィア　いえ、わたしそこまで。
53 フィリップ　仕事が第一だ。

54 シルヴィア　間。
55 フィリップ　まるで毛嫌いしてるみたい。
56 シルヴィア　異議あり。
57 フィリップ　とことん嫌ってるみたい。
58 シルヴィア　どう言っても、わかってもらえないんだね？
59 フィリップ　オリヴァーがかわいそう。
60 シルヴィア　彼を好きになることがどうしてそんなに大切なんだ？
61 フィリップ　きっと気を悪くする。
62 シルヴィア　どうしてそんなに大切なんだ？
63 フィリップ　あなたが毛嫌いしてるんじゃないかと思ったら。
64 シルヴィア　また大げさなことを。
65 フィリップ　忌み嫌ってるって。
66 フィリップ　どうしてそんなに大切なんだ？
67 シルヴィア　間。
68 フィリップ　物腰がね、それだけだよ。
69 シルヴィア　「物腰」？
70 フィリップ　それだけ。
71 シルヴィア　どんな「物腰」？ どういう意味、「物腰」って？
72 フィリップ　はっきりとは言えない。
73 シルヴィア　どんな「物腰」？
　　わからない。ただ物腰が。
　　どういう意味？

74 フィリップ　とにかく僕たちにはあまり共通点がない。

間。

75 フィリップ　君はどうかわからないけど、すごく、すごく疲れたよ。

間。

76 シルヴィア　わたしね、あなたのことを考えるの、ときどき。
77 フィリップ　それは心強い。
78 シルヴィア　ちがうの、あなたが仕事をしてるときに考えるの。昼間、ここにいて。この部屋に座って、お茶を飲んだりラジオを聴いたりしながら、仕事をしてるあなたのことを考えるの。あなたは茶色のスーツで、大きなアパートの部屋のすみにいる、お客さんは部屋を見て回ってる。そしてあなたは大きなドアに全部鍵をかけて、とぼとぼと会社に戻る。
79 フィリップ　なんて妙なことを。
80 シルヴィア　でわたし思うの、孤独なんだわって。フィリップはきっと孤独なんだわ。
81 フィリップ　なんて妙なことを言うんだ、そんなおかしなこと。
82 シルヴィア　今晩言ってたでしょう、仕事に幸せを感じない、オリヴァーとわたしがうらやましいって。あれは悲しかった。
83 フィリップ　ああ、あれ。
84 シルヴィア　だから考えたの、あなたのことを、そして何があなたを幸せにするのか。
85 フィリップ　僕のことは心配いらないよ。
86 シルヴィア　そしてどんなに辛いだろうって、それが手に入らないとしたら。あなたを心から幸せにするものをその手でつかめないとしたら。
87 フィリップ　僕のことは心配いらない。
88 シルヴィア　それより悲しいことってある？
89 フィリップ　大げさだって。
90 シルヴィア　そんな人生を生きるなんて？
91 フィリップ　君がいれば幸せだよ。
92 シルヴィア　それにもし、マースデン先生が正しいとしても——
93 フィリップ　なあ。
94 シルヴィア　もし理由はなくても——
95 フィリップ　だからもうつくらないことに——
96 シルヴィア　もしつくれるとしても、つくるとしても——
97 フィリップ　シルヴィア。
98 シルヴィア　わたし思うの、それで——
99 フィリップ　だからもうつくらないって。
100 シルヴィア　それで何か変わるんだろうかって。

間。

101 シルヴィア　子供を持てば変わるのか。そのことが。

再び間。フィリップは立ち上がる。

102 フィリップ　ワインの飲みすぎだよ。
103 シルヴィア　一度も話したことないでしょう、このこと。

104 フィリップ　もうベッドに戻るよ。
105 シルヴィア　お願いだから。
106 フィリップ　疲れてる。明日も一日忙しいし。
107 シルヴィア　お願い、待って。すこしだけ。
108 フィリップ　七時には起きないと。
109 シルヴィア　いて。

間。

110 シルヴィア　お願い、いて。

間。

111 シルヴィア　わたしかえって不安になったの、マースデン先生に子供ができない理由は見当たらないって言われたとき。先生は頑張りさえすればって感じだった……
112 フィリップ　もう頼むよ、シルヴィア……
113 シルヴィア　でもあのとき考え始めたの、わたしどうしてそこまでほしいのか。子供が。どうしてそこまで大事なのか。そこまで必死なのか。ときどき、全身で祈ったわ。ベッドであなたのとなりに寝ながら全身で祈った、感じないか……ちょっぴりでいい。芽生えてこないか。体のなかに新しい命が。
114 フィリップ　もう頼むから……
115 シルヴィア　だってそれは自然なこと、女だもの。母親になるのは。だから、祈って祈って祈った。
116 フィリップ　何を言ってるんだ？
117 シルヴィア　でもそのうち気づいたの、それだけじゃないって。わたしが子供をほしかったのは二人でいるのがこわかったからなの。

間。

118 シルヴィア　あなたに黙ってたことがあるの。
119 フィリップ　もう理解できない。
120 シルヴィア　覚えてる、わたしが共演したあの俳優？
121 フィリップ　いまはいい。そういう話し方をするなら。
122 シルヴィア　リチャードって名前よ。リチャード・コーヴェリー。
123 フィリップ　たまに君のことが理解できない。
124 シルヴィア　『桜の園』で共演した。観にきてくれたでしょう。
125 フィリップ　そいつが何？
126 シルヴィア　背が高くて色白の。エピホードフの役。
127 フィリップ　その芝居は覚えてる。
128 シルヴィア　あなた会ってるわ。夜、芝居がはねて、いっしょに飲みにいったでしょう、あの小さなパブに。
129 フィリップ　どうしていまさらそんな話を？
130 シルヴィア　わたし彼が好きだった。やさしい人だった。変わってて引っ込み思案だけど。でもやさしくて。

いったん口をつぐむ。

131 シルヴィア　あなたはあまり好きじゃなかった。覚えてる、好きじゃないって言ってた。

132 フィリップ　何年も前だろう。そいつと会って一杯飲んだ。ほかにも役者が大勢いた。ほとんど思い出せない。どうしていきなり大事なことになるんだよ、僕がそいつをどう思うかなんて？

133 シルヴィア　彼に腹を立ててた。言ってたわ、たしかあなた言ってた、「不愉快なやつだ」って。

134 フィリップ　本当に思い出せない。

135 シルヴィア　「あいつ不愉快だ」って。

136 フィリップ　何だってそんな話を？

137 シルヴィア　物腰のことも言ってた。今晩のオリヴァーのことと同じ。

138 フィリップ　こんな会話をする意味がわからない。とにかくとても疲れた。

139 シルヴィア　三日前にタイムズの記事で読んだの、彼自殺したって。そのときはあなたに言わなかった。理由はわからない。でも言わなかった。

140 フィリップ　そう、それは気の毒に。

141 シルヴィア　覚えていたからかもしれないわ、あなたが好きじゃなかったこと。彼のせいでなぜか気分を害したこと。

142 フィリップ　そのことがそんなに気になるのか。

143 シルヴィア　首を吊ったの。スキャンダルがあって。裁判沙汰よ。猥褻行為とか、その手のこと。

144 フィリップ　なるほど。

145 シルヴィア　たぶん同性愛者だったの。リチャード・コーヴェリーはたぶん同性愛者だったの。

間。

146 シルヴィア　記事を読んで考えた、あの夜のこと。なぜあなたがあんなに嫌ってるように見えたか。

147 フィリップ　そいつのことはほとんど思い出せない。君の印象にはずっと残ってるようだけど、僕にはほとんど思い出せない。自ら命を絶ったのは気の毒だし、君がその件で動揺してるのも気の毒だけど、僕はほとんど会ったこともないんだ。

148 シルヴィア　どこがそんなに気に食わなかったの？

149 フィリップ　気に食わなかったかどうかも覚えてない。君が大げさなんだ。多少不愉快だっただけだ。ああいう男って不愉快なところがあるだろう。女みたいで。思い出したよ、あいつはあからさまに僕を見てた。

150 シルヴィア　見ていたとしても、そうだとしても、どうしてそこまで不快に思うの？

151 フィリップ　こんな話馬鹿げてる。わざと怒らせようとしてるのか。

152 シルヴィア　なぜリチャード・コーヴェリーを毛嫌いするのかわからなかった。だからあなたには言わなかった。

153 フィリップ　素晴らしい。君は僕を責めるんだ、ひねくれてる、死んだのは僕の責任ってわけか、たった一度、二十分ほどしか会っていない男なのに。

154 シルヴィア　責めてなんかいない、フィリップ。訊いてるだけ。

155 フィリップ　とにかく、本当に心配だよ。どうやらまたぶり返してる。

156 シルヴィア　ごめんなさい、そう感じたなら。

157 フィリップ　あのころと同じ話し方だ、どきっとするぐらい、デヴォンに行く前と。

158 シルヴィア　病気。そう呼ぶことに決めたでしょう？わたしの病気。

159 フィリップ　話はすんだ？

160 シルヴィア　まるで重いインフルエンザ。

161 フィリップ　ほかに話したいことは？もう行ってもいいかな？

162 シルヴィア　無理に引き留めたつもりはなかった。

163 フィリップ　いてくれって君が頼んだんだ。どう見ても躍起になってた、その奇天烈で、奇妙な考えを伝えようと、それがすんだかどうか僕は単純に訊いてるだけだ。

164 シルヴィア　オリヴァーはリチャード・コーヴェリーと同じ意味で不愉快だったの？

165 フィリップ　オリヴァー・ヘンショーを同性愛者と思うかってことなら、本当にわからない。考えてみたこともない。彼の私生活なんて僕には関係ないことだし君にも関係ないだろう。僕はこう考えることにする、君の様子が今晩すこしおかしいのは、コーヴェリーって男が死んで、動揺しているからだ。それと、ワインを少し飲みすぎたのかもしれない、それで多少は納得できる、すさまじい不条理としか言えないこの状況にも。今度こそ失礼して、本当にベッドに戻らないと。

166 シルヴィア　おやすみなさい、フィリップ。

167 フィリップ　いっしょにベッドへおいで。疲れてるだろう。

168 シルヴィア　もうすこししたら。

フィリップが退場し、シルヴィアが一人残される。数秒経ち、彼女は立ち上がる。彼に続いて寝室に入ろうとするが、そこでふと身ぶり――前場終わりのオリヴァーの身ぶりに呼応している。苦悩。部屋を出る。

第4場　二〇〇八年

オリヴァーがアームチェアに手足を投げ出して座っており、まだガウン姿である。脇にはほとんど空になったスコッチのボトルとグラス。照明は薄暗い。テレビがついており、「ビッグ・ブラザー」か、それに似た現代の番組の音が部屋じゅうに響く。するとドアをノックする音。オリヴァーは微動だにしない。ノックの音が大きく、しつこくなる。ようやくオリヴァーはドアへ這っていき、開ける。シルヴィアが登場する。食料品を一袋持っている。

1 シルヴィア　ざけんなよ。
2 オリヴァー　こちらこそ会えてうれしい。
3 シルヴィア　手首切ってたらどうしようと思った。
4 オリヴァー　ことあるごとに言ってきたでしょ、自分を抹殺する道を選ぶとしたら有毒ガスだって。

シルヴィア、オリヴァーの脇をかすめて通り、キッチンへ消える。つぎのいくつかの台詞は舞台のそとで言う。

5 シルヴィア　持ち時間十五分。
6 オリヴァー　ほんと時間に寛容。親友でよかったー。
7 シルヴィア　マリオが空港に着いたとこなの。これからデート。それからお泊まり。いかにもだけど、さみしかったから。
8 オリヴァー　素敵。
9 シルヴィア　食料買ってきたよ。アボカドのムース。オーガニックのフェタチーズ。マダガスカル・バニラのヨーグルト。基本のキ。
10 オリヴァー　ありがと、ママ。
11 シルヴィア　ビールもらう。
12 オリヴァー　ご自由に。

彼女がビールを手にキッチンのドアから現われる。

13 シルヴィア　あんたウンコみたい。
14 オリヴァー　笑える、屋根裏の肖像画が僕の身代わりになってくれてると思ってたのに。
15 シルヴィア　何があったの？

間。

16 オリヴァー　フィリップ、僕のせいで落ち込むんだって。
17 シルヴィア　あんたのせいで落ち込む。
18 オリヴァー　ゆきずりのセックスとか。そのせいで。
19 シルヴィア　なるほど。
20 オリヴァー　だから僕、それはべつものだよって言った。つまり、いっしょにいるときは……フィリップと二人のときはちがう。けどほかのは、公園とかサウナとかネットとか、何でもいい、そういう……
21 シルヴィア　発展場とか。
22 オリヴァー　発展場とか、ご名答、そういうのはべつもの。それは……何てゆーか、それはトイレに行くみたいなもんだから。他人連れってだけで。
23 シルヴィア　他人連れでトイレ。

24 オリヴァー　そのとおり。

シルヴィアは一瞬黙る。彼女の携帯電話が振動する。

25 シルヴィア　ごめん、おへその下でブルブル言ってる。
26 オリヴァー　うらやましい。

彼女は携帯を取り出し、発信元を確認する。

27 オリヴァー　バジル臭の男？
28 シルヴィア　レイシスト。

彼女は電話に出る。

29 シルヴィア　（電話で）ハーイ。おかえり。どうだった？……
30 オリヴァー　僕からよろしくって。
31 シルヴィア　そう……ううん、大丈夫。さみしかった。いまオリヴァーんち。
32 オリヴァー　よろしくって。
33 シルヴィア　オリーがよろしくって。マリオからも。うん。オッケ。すぐすむ。
34 オリヴァー　僕の持ち時間食ってるんだけど。

シルヴィアは、オリヴァーに黙れと言わんばかりに顔をしかめる。

35 シルヴィア　車ないの、地下鉄で行く。（腕時計を見て）九時には着く。遅くても九時半。
36 オリヴァー　僕の持ち時間食うなって、十五分しかないんだよ。
37 シルヴィア　（オリヴァーに、電話を手でふさぎ）いいからお黙り。
（再び電話で）あ、いいね。おいしそー。じゃあとで——駅着いたら電話する。チャーオ。おかえり。ティアーモ。

電話を切る。

38 オリヴァー　ティアーモ？
39 シルヴィア　うっせー。
40 オリヴァー　いかにもハーレクイン・ロマンス。

間。

41 シルヴィア　オッケ、じゃいまからフィリップの心のなかをのぞいてみる。何があるか当ててあげる……何が彼を落ち込ませるか。
42 オリヴァー　どうぞ。
43 シルヴィア　オッケ、行くね。
44 オリヴァー　拝聴します。
45 シルヴィア　あなたはいま、公園を歩いています。夜中です。あなたはそこである男を目に留めます。
46 オリヴァー　なるほど。
47 シルヴィア　彼はイケメンです。超イケメンです。すると彼は自分のブツを引っ張り出します。
48 オリヴァー　いいね。
49 シルヴィア　しかもデカい。巨大です。彼は巨大なブツをブルンと振って、いや、その巨大なブツであな

50 オリヴァー　たの顔をビンタします。あなたはたまらなくなって――
51 シルヴィア　僕はたまんなくなってその場にしゃがんで満足させてやりたくなります。あなたはたまらなくなって、いま端的におっしゃった通り、その場にしゃがんで満足させてやりたくなります、でもストップ。ニュース速報。あなたは気づきます。彼について。二、三の事実に。この男はレイシストだ。あるいは十四歳の少年少女にヤクを売っている。それでもあなたはしゃぶりますか？それでも彼を満足させてやりますか？

オリヴァーはいったん口をつぐんで考える。

52 オリヴァー　巨大って、どれくらい巨大？
53 シルヴィア　真面目に考えて。あなたはしゃぶりますか？
54 オリヴァー　たぶん。

短い間。

55 シルヴィア　わたしはフィリップの味方だね、この件では。
56 オリヴァー　べつに会話とかしない。そいつの世界観認めたりしない。おっしゃるとおりホロコーストなんてなかったよね、とか言わない。しゃぶってやるだけ、そいつに投票するわけじゃない。
57 シルヴィア　全面的にフィリップの味方だね。
58 オリヴァー　とにかくさ、あんたがいま選んだシナリオは最悪。変なマニアとか赤ん坊殺しとか。何でもいいけど。そんなの例外だよ。だって、男のほとんどは、サウナとかにいる男のほとんどは、あんたや僕と変わんない。だいたいなんでファシスト・マニア選ぶかな？ピアニストで、お金を全部セーブ・ザ・チルドレンに寄付してる人かもしれないじゃん？
59 シルヴィア　かもしれないよ。けど大事なのは――しかもフィリップが落ち込むのはそのせいだと思うんだけど――大事なのはあんたが知らないってこと。誰だか知らない男のブツをしゃぶってる。
60 オリヴァー　どうでもいいじゃん。

間。

61 オリヴァー　これ、正直に答えなきゃだめなやつ？
62 シルヴィア　できれば。
63 オリヴァー　正直な真実を？
64 シルヴィア　それだけを。
65 オリヴァー　不都合なことでも？
66 シルヴィア　何のための友達よ？
67 オリヴァー　だったら正直な真実は、ヤるだけじゃない、つまりしゃぶるだけじゃない、かなり好きかも。いまの具体例。あんたのチョイス。かなりそそられる。
68 シルヴィア　やっぱりね。
69 オリヴァー　だってね――あぁ、もう、教えるつもりはなかったけど、フィリップが来たとき、ここに男がいて、そいつが、あぁもう、どう言えばいいんだ……
70 シルヴィア　言ってみて。
71 オリヴァー　その、ナチスでした。
72 シルヴィア　ナチス？ナチスを呼んだの？
73 オリヴァー　本物のナチスじゃない。
74 シルヴィア　何それ、本物のナチスじゃないって？
75 オリヴァー　ただのごっこ。
76 シルヴィア　ナチスごっこ？

77 オリヴァー　だから、ほら、ネットで会ったの。そいつらいろんなコスチューム持ってて、こっちが選んで、来てもらって……だから、プレイだよ。

78 シルヴィア　プレイ。

79 オリヴァー　だから、何でもあり。消防士。パイロット。配管工。

80 シルヴィア　でもあんたはナチスを選んだ。

81 オリヴァー　やるじゃんプレイ。ほら、変態系の。本気じゃない。ファンタジーの世界。

82 シルヴィア　オッケ、で。あんたの役は？そいつはナチスで、あんたは何？バイキング？

83 オリヴァー　いや、僕は僕。

84 シルヴィア　あんたはあんた？

85 オリヴァー　そう、そいつはナチス、でも僕は僕。

86 シルヴィア　であんたがプレイしてる最中に、そこにフィリップが入ってきた。

87 オリヴァー　みたいな。

88 シルヴィア　「みたいな」？

89 オリヴァー　いや、もうやめてたから。僕からやめた。お酒飲んでただけ。

90 シルヴィア　ナチスとお酒？

91 オリヴァー　そう。そしたらフィリップが。

92 シルヴィア　そりゃまずいよ。

93 オリヴァー　ありがと。知ってる。

間。

94 オリヴァー　昔ゲイ雑誌の文通欄を見てたのね。ずっと昔。フィリップより前。そしたら一人目に留まってさ。こんな感じの――「ゲイ、三十三歳、ノンスモーカー、趣味はボンデージ、疑似レイプ、レザー、ラバー、チェーン、リミング、フェルチング。恋人募集中。」

95 シルヴィア　それが僕の人生。

96 オリヴァー　でも素敵な相手を見つけたんだよ。

97 シルヴィア　どうして選ばなきゃなんないわけ？いいんじゃない。理解してやるならいいんじゃない。

再びシルヴィアの電話の振動が聞こえる。

98 シルヴィア　ごめん。また鳴ってる。

テキストメッセージである。彼女は読んでにこりとする。

99 オリヴァー　またイタリア人？

100 シルヴィア　かもね。ヤベ、行かなきゃ。

オリヴァーは答えない。シルヴィアは立ち上がり、上着を着始める。

101 オリヴァー　さっきセバスチャンから電話があった。例の雑誌にゴーサインが出た――資金ができたって。ゲイ文学にとってこの雑誌は、ギロチンにとってのマリー・アントワネットみたいな存在になるって。広告塔になる。

102 シルヴィア　「文学」？

103 オリヴァー　超ビッグネームがついたみたい。ブリティッシュ・エアウェイズ、ＢＭＷ、グッチ、ギャップ。そういうの。でかいとこばっか。みんなあやかろうとしてる。

104 シルヴィア　まあ、ゲイってイケてるし。可処分所得も多いもんね。

105 オリヴァー　僕のアイデアも取り上げてくれてる。トム・フォードのインタビュー。ゲイの長者番付。
106 シルヴィア　名前は決まってんの？
107 オリヴァー　名前？
108 シルヴィア　雑誌の。
109 オリヴァー　「ＢＬＩＳＳＦＵＬ（ブリスフル）」。究極の幸せ。
110 シルヴィア　あ、そ。
111 オリヴァー　ほかにもある。セバスチャンが推薦してくれた単発の仕事。若い子向け雑誌の編集長が明日会いたいって。おもしろそう。
112 シルヴィア　朝電話する。
113 オリヴァー　とにかく、順調だよ。拾う神あり。男なんかきれいさっぱり忘れて。忙しくしなきゃ。さもないと……
114 シルヴィア　さもないと？
115 オリヴァー　沈んじゃう。
116 シルヴィア　「沈んじゃう」？

間。

117 オリヴァー　こんなにひどい状態ってなかった。一度も。マジで。
118 シルヴィア　まあ、いやしてくれるよ。「ＢＬＩＳＳＦＵＬ」が。それからもちろん、例の本。
119 オリヴァー　本？
120 シルヴィア　本だよバカ、覚えてるでしょ？
121 オリヴァー　あぁ、あれ。
122 シルヴィア　たしか小説書いてませんでしたっけ。
123 オリヴァー　それをもち出すとこがあんたらしい。
124 シルヴィア　愛。人生。何らかの意味。せめて意味を見出そうとすること。

ドアへ向かう。開ける。

125 シルヴィア　また話そ。
126 オリヴァー　もうわかんない、自分が何を求めてるか。とにかくまずい。
127 シルヴィア　何が？
128 オリヴァー　こわくて。

間。そして――

129 オリヴァー　つまり、こんなふうに座って冗談言い合って、でも何が大事かわかんなくなった。それを見つけなきゃ。さもないと……
130 シルヴィア　さもないと何？
131 オリヴァー　どうなっちゃうんだろう？

間。

132 オリヴァー　どうしても頼みたいことがある。簡単に頼めることじゃない。でも必要だから。これっきりにする。二度とない。わかるよね。でも必要だから。

間。

133 シルヴィア　ざけんなよ。
134 オリヴァー　泊まってって。今晩だけ。お願い、シルヴィア。
135 シルヴィア　無理。
136 オリヴァー　今回だけ。お願い。お願い。お願い。
137 シルヴィア　だめだよ、オリヴァー。
138 オリヴァー　普段なら頼まない。わかるでしょ。でもいまはどうしても――
139 シルヴィア　やめて、こんなこと。
140 オリヴァー　いまはどうしても自分がこわくて。
141 シルヴィア　自分がこわい？
142 オリヴァー　今晩一人になっちゃうのが。今晩一人でいるのが。

彼女がこれらの言葉を飲み込む間。
フィリップが一九五八年の服装で登場する――亡霊である。シルヴィアやオリヴァーには見えないが、彼の存在はどういうわけか感じられる。陰から現われる。

143 オリヴァー　自分の中のどこかで感じるの……なんか、裏切りを。
144 シルヴィア　裏切り？
145 オリヴァー　そう。
146 シルヴィア　裏切ったの、裏切られたの？
147 オリヴァー　両方。わかんない。両方。
148 シルヴィア　オッケ。深呼吸して。もっぺんはじめから。頑張って理屈を通すの。わかりやすくだよ、そうすれば、もしかしたら、もしかしたら助けてあげられる。
149 オリヴァー　頑張ってんじゃん。
150 シルヴィア　もっと。
151 オリヴァー　何度も同じ場所に戻っちゃう。それを何とかしないと。
152 シルヴィア　同じ場所？
153 オリヴァー　べつに朝目が覚めたら敬虔なクリスチャンとかムスリムとかそういうものになってやるっていうんじゃない。いきなり頭ツルツルにしてお経唱えたりしない。だけど何かが必要なんだよ、何かの悟りが。さもないと、ほんと、サイテー、こんなのもたない。
154 シルヴィア　何が？
155 フィリップ　オリヴァー。
156 オリヴァー　あの声。
157 シルヴィア　どの声？
158 オリヴァー　あの声が――
159 フィリップ　オリヴァー――
160 オリヴァー　お前はだめだって――
161 フィリップ　オリヴァー――
162 オリヴァー　お前は愛されない――
163 フィリップ　オリヴァー――
164 オリヴァー　お前はその程度の人間だって。

間。フィリップは陰のなかに下がる。

165 シルヴィア　マリオに電話する。
166 オリヴァー　ほんとにごめん。
167 シルヴィア　いいよ。
168 オリヴァー　ありがと。ありがと。ありがと。

169 シルヴィア　わたしにはわからない、なんで。どういうわけで――

170 オリヴァー　ほんとにありがと。

171 シルヴィア　あんたは抜け出せないのか。

172 オリヴァー　明日は一日彼といっしょにいてあげて。朝も、昼も、夜も。

173 シルヴィア　ありがと。お許しいただいて。さすが寛容。

174 オリヴァー　いやみはやめて。

間。

175 シルヴィア　［ビール］もう一本もらうよ。

176 オリヴァー　僕が取ってくる。ゆっくりして。僕の家は君の家。（ミーア・カーサ、トゥーア・カーサ）

キッチンへ入る。シルヴィアは座る。

177 シルヴィア　わたしこんなこといつまでもできないんだよ。オリー。ここにいてあげるなんて。こんなふうに。よくないもん。お互いにとって。それだけは言っとく。

178 オリヴァー　ご恩は忘れません。

間。オリヴァーが引き出しを開け、ボトルの栓を抜く音。

179 シルヴィア　皮肉なのは、マリオが早くあんたに会いたがってること。わたしがいつでも話題にするから。土曜日のプライドに来たいって。マリオはローマのパレードしか行ったことないんだよ。司祭が卵投げてたって言い張んの、でもそれってマリオ流の反カトリックなプロパガンダ。赤ちゃんほしがってるって言ったっけ？　わたし言ったの、「イタリアのお母さんに会うまではだめ」って。フィロメーナって名前なの。信じられる？　フィロメーナ。でっかい活火山の名前みたい。手づくりのニョッキは死ぬほどうまいだろうけどね。

間。シルヴィアが立ち上がり、キッチンのドアへ向かうと同時に、フィリップが再び陰から現われ、彼女がいままで座っていた椅子に座る。

180 シルヴィア　だからつまり、あんたが自分で解決するしかない、って言ってんの。

フィリップは想いに沈んだように前を見つめる。ドアをノックする音が聞こえる。彼はしばらく無視する――ノックはしつこく続く。やがてフィリップはゆっくり立ち上がり、ドアのほうへ歩く、と同時にシルヴィアはキッチンへ消える。フィリップがドアを開けると、オリヴァーが一九五八年の服装で立っている。レインコートを着ており、びしょ濡れである。

第5場　一九五八年

1 フィリップ　やあ。
2 オリヴァー　ごめん。
3 フィリップ　ずぶ濡れじゃないか。
4 オリヴァー　うん。

間。

5 オリヴァー　来るつもりはなかった。僕たち……
6 フィリップ　僕たち会わないことにしようって。
7 オリヴァー　わかってる。
8 フィリップ　話さないようにしようって。
9 オリヴァー　うん。
10 フィリップ　二人で決めたんだ、こんなことよくないって。
11 オリヴァー　わかってる。

間。

12 フィリップ　ずぶ濡れじゃないか。
13 オリヴァー　ぼうっとしてて。
14 フィリップ　びしょびしょだ。
15 オリヴァー　図書館に傘を忘れて。
16 フィリップ　とにかく、入ったほうがいい。

オリヴァーは入る。落ち着きがない。

17 オリヴァー　ごめん。
18 フィリップ　シルヴィアはウィンブルドンだ、友達のうちに泊まってる。明日戻る。
19 オリヴァー　知ってる。電話で話した。だから来た。
20 フィリップ　こんなことよくない。
21 オリヴァー　君に話さなきゃいけないんだ、フィリップ。
22 フィリップ　まだ言うことがあるとは知らなかった。
23 オリヴァー　最後にもう一度。そしたらもう迷惑かけない。

間。

24 フィリップ　とにかく、座ったほうがいい。
25 オリヴァー　ありがとう。

互いに向き合って座る。長い間があり、そしてオリヴァーが話し始める。

26 オリヴァー　僕はどうしても……
27 フィリップ　何？
28 オリヴァー　何でもない。僕は思ったんだ……できれば……
29 フィリップ　できれば何？

間。

30 オリヴァー　公園を歩いてきた。土砂降りだった。うっかりしてた。図書館にいたんだ。何か書こうと。でもだめだった。書けなかった。だから出た。ここに来た。でも傘を忘れた。

31 フィリップ　そう。

32 オリヴァー　無理だった……二人で決めたのはわかってる……でも無理だった……

33 フィリップ　無理って何が？

34 オリヴァー　僕は人生ずっと待っていた、何かの確証を、自分は一人じゃないっていう。

35 フィリップ　そう。

36 オリヴァー　それが見つかれば、その確証が見つかれば、君も二度と……僕は二度と——僕は来なきゃならなかった。君に会いに。ごめん。

37 フィリップ　勘弁してくれ。

間。

38 オリヴァー　おかしいよ。わかってるつもりになってた。

39 フィリップ　何を？

40 オリヴァー　孤独ってどういうことか。一人でいるって。わかってるつもりになってた。

41 フィリップ　どういう意味？

42 オリヴァー　でもいまは。いまはわかってる。

長い間。

43 フィリップ　何を言おうとしてるんだ？

44 オリヴァー　君を愛してるってこと。

45 フィリップ　頼む、二度と言わないでくれ。馬鹿馬鹿しい。

46 オリヴァー　どうしようもない。どうにかできることじゃない。

47 フィリップ　二人で決めたんだ。君は……僕はお願いした、そんな話はしないでくれって。

48 オリヴァー　心から愛してる。

49 フィリップ　やめてくれ、そんな言葉。

50 オリヴァー　夜も眠れない。君の顔が浮かんで。君の声が聞こえて。

51 フィリップ　やめろ。

52 オリヴァー　二人でいたとき、この前、二人でいたとき、感じなかった？——まるで突然、すべてが、あのとき君のすべてが、それにいまだって……

53 フィリップ　やめろ。

54 オリヴァー　君が恋しい。

55 フィリップ　出ていってくれ。

56 オリヴァー　いや。すこしだけ。頼むからすこしだけいさせて。

間。

57 オリヴァー　この四ヶ月で……僕は理解した。

58 フィリップ　理解したって何を？

59 オリヴァー　昔はただの性欲だと思ってた。体の欲求。倒錯だって。

60 フィリップ　たしかに倒錯だ。

61 オリヴァー　ぴったりの女の子に出会ったら、結婚したら、子供ができたら、体の欲求は、性的な欲求は止まるだろうって。

62 フィリップ　倒錯だ。
63 オリヴァー　消えるだろう。克服できるだろうって。
64 フィリップ　そのとおり。
65 オリヴァー　でもそこで、君と出会って……
66 フィリップ　克服できる。
67 オリヴァー　それ以上のものだってわかった。

間。

68 オリヴァー　それは自分のすべてだ。捨てられるようなものじゃない。ただの一部分じゃない。

間。

69 オリヴァー　二人でいるとき。二人で会うたび。そのたびいつも。話をするとき。
70 フィリップ　もう終わったことだ。
71 オリヴァー　それ以上のものだって気づいた。徐々にわかった……
72 フィリップ　勘弁してくれよ……
73 オリヴァー　二人の人間のあいだに起きることは神聖なものにもなるんだって。そしてかけがえのないものに。その二人の人間が誰であるかは問題じゃない。

間。

74 オリヴァー　子供のころを思い出す。暗くて、誰にも言えない秘密に気づいてた。自分が何に焦がれているか。自分は何者か。だから夜も眠れなかった。おそろしかった。何もかもが、誰もかれもが、僕に向かって告げていた、それは間違いだって。
75 フィリップ　たしかに間違いだ。
76 オリヴァー　僕もそう思ってた。信じてた、世界じゅうが僕にそう告げるなら、世界が正しいに決まってる。疑うなんて何さまだ？
77 フィリップ　何を言おうとしてるのか僕にはわからない
78 オリヴァー　僕が言ってるのは、君と出会ったとき、君に恋をしたとき……僕にはわかった、それは真実だって。間違っているのは世界だって。僕の気持ちは正直で純粋で善きものだって。

間。

79 オリヴァー　こんな場所があった。公園のなかに。男たちが出かける場所。

間。

80 フィリップ　聞きたくない。
81 オリヴァー　僕は行ってみた……一人男がいて、そいつが……僕はそいつを知らない。そいつも僕を知らない。ほとんど話もしなかった。一言だけ。お互い顔も見なかった。そのとき……そのときまるで僕はそこにいなかった。二、三分で終わった。
82 フィリップ　もう帰ったほうがいい、オリヴァー。
83 オリヴァー　でも僕は……でも僕らは……僕らのときはそうじゃない、同じじゃない。なぜってほら、べつのものがあったんだ、フィリップ。二人で言葉を交わして何かがわかったと思った、君は何者か。君の恐怖。君の孤独。君の求めるもの。目を見ればわかった、君も僕と同じ、善き人間だって。

84 フィリップ　善き人間？

85 オリヴァー　そう、フィリップ、善き人間。善き人間。善き人間。あのときはじめて、いっしょにいて、お互い抱き合ってはじめて感じた、僕にはプライドがあるってこと。僕という人間でいることのプライド。

86 フィリップ　それが僕に話さないといけないこと？

87 オリヴァー　そう思う。話さなきゃいけない、僕らのあいだに起きたことはちがうってこと。僕が行ったあの場所とはちがう。

88 フィリップ　おんなじだ。君は自分を偽ってる。間違ってる。

89 オリヴァー　僕は思った、ああいう男たちのなかには、君も見ればわかるはずだ、ああいう男たちのなかには、あの薄暗がりを徘徊して待ってる男たちのなかには、選んでやってる人間もいる、たぶんたいていはやりたくてやってる、だけどそれは知らないからだ、どこで……どうすれば見つかるか、しかも自分はしょせんそういう人間だって言われているから、自分は暗がりに立って誰かに触るのを、べつの男の肌に触るのを待ってる人間だって、だから自分はそれだけの人間だと思い込んでる、だけど彼らが求めているのは、彼らが本当に求めているのはそれ以上のもの、僕らがいま手にしようと思えばできるもの……誰かとの深いつながりなんだ、せめてそこにしがみつくことができたら。

90 フィリップ　話はすんだ？

91 オリヴァー　だって出会った瞬間から君だけが僕の本当の名前を知っていたように感じたんだ。

92 フィリップ　どういうこと？

93 オリヴァー　僕らは同じ言葉を話しているような。

間。

94 フィリップ　でも僕はそうは感じない、オリヴァー。

95 オリヴァー　本当に？

96 フィリップ　そうだ、オリヴァー。僕はちがう。僕はちがう。僕はちがう。

間。

97 フィリップ　なあ、オリヴァー、僕はシルヴィアを愛してる。シルヴィアも僕を愛してる。僕らは夫婦でお互い愛し合っている。これまでのことは……つまり僕らのあいだに、君と僕のあいだに、オリヴァー、僕ら二人のあいだに起きたことは単なる過ちだった。君が何と呼ぼうとかまわない。一瞬の弱さ。弱さ。それだけだ。

98 オリヴァー　でも君は言ってた——

99 フィリップ　いろいろ言ったかもしれない、オリヴァー、でも残念ながらきっと本気じゃなかったんだ。だって、僕は正気じゃなかった。取りつかれたようだった。ただわかってほしい、僕は君のことを悪く思ってはいない。うらみもない、悪意もない。愛情だってある。君はまともな男だって信じてる。僕をそそのかしたとも、誘惑したとも、悪気があったとも思わない。僕にだって責任はある。二人ともが過ちを犯したんだ。それだけ。君の幸せを祈ってる、オリヴァー。でも何が起きたかを思い出すと……正気を取り戻したいまになって、僕らのあいだに何が起きたか、僕ら二人のあいだに起きたいろんなことを思い出すと、恥じる気持ちでいっぱいになる。吐き気がする。

100 オリヴァー　吐き気？

101 フィリップ　今日は僕を説得しに来たんだろう、僕らがお互いを思う気持ちは、君が僕を思う気持ちは高潔で純粋なものだって。

102 オリヴァー　そうだ。

103 フィリップ　もちろん、友人として思ってくれるのはいい。それは僕も同じだ。君を好きになって尊敬す

るのはいい、尊敬しようとするのは、友人として。でもそうじゃなくて……君がさっき話していたこと……そういう場所、そういう連中。

104 オリヴァー 彼らが何？

105 フィリップ そういう場所……さっき雄弁に語ってくれた場所。そいつらは僕とはちがうし僕もそいつらとはちがう。僕に正直になれと言うなら、オリヴァー、正直に真実を言えってことなら、あいつらには身の毛がよだつ。言いすぎじゃない。君には正直に言わせてもらう。あわれだとは思うけど身の毛がよだつ。見たことはあるよ……実際よく見る。気づいてる。人ごみでもバスでも通りでも、僕は吐き気がする。あいつらの歩き方、人を見る目つき、みんないっしょだ。僕はあいつらとはちがう、オリヴァー。そして君もきっとちがう。だからお互いこのことは水に流さないと。それがいい。絶対にそれがいい。

106 オリヴァー 本当に？

107 フィリップ いつの日か感謝してくれるだろう。理解してくれるだろう、これはある意味、君を守るためだってことを。君自身から。君はきっと理解する。僕なりの妙なやり方だけど、これは僕から君への贈りものだ。別れの贈りもの。

長い間。

108 オリヴァー 帰ったほうがよさそうだ。

109 フィリップ ああ。

間。

110 オリヴァー 彼女は知ってるよ、フィリップ。

111 フィリップ 知ってるって何を？

112 オリヴァー 全部知ってる。君のこと。彼女は全部知ってるんだ、フィリップ。

113 フィリップ どういう意味だ？

114 オリヴァー 君が夜眠れずにいるわけを。君の心をかき乱すものを。君が恐れるいろいろなものを。君の孤独な考えを。だからいまこそ――だってこんな機会は二度とめぐってこない――いまこそ君も考えないと、なぜ君は彼女の気持ちを踏みにじるのか。何もかも偽って。僕ら二人のことを言ってるんじゃない。僕らのあいだに起きたことじゃない。正反対のことを言ってる――君があるがままの事実を拒絶してるってことだ。

115 フィリップ シルヴィアの話はしないでくれ。

116 オリヴァー どうして？

117 フィリップ こんなふうに彼女の話をしたくない。僕らだけで。こうやって。妻のことを話題にしたくない。

118 オリヴァー 僕が軽い気持ちで話しているとでも？ シルヴィアのことが心配なんだよ。心から。

119 フィリップ その話はしたくない。

120 オリヴァー でも僕にはわかった、これは彼女が望んだことなんだ。これじゃない。今のこの状況じゃない。僕らのこと。僕らの出会い。彼女が望んだことなんだ。

121 フィリップ 頭がおかしいよ。

122 オリヴァー 彼女が結びつけたんだ、フィリップ。僕にはわかる、彼女が僕らを結びつけた。

123 フィリップ 狂ってる。

124 オリヴァー 無意識かもしれない、自分が何をしているか、はっきりとわかっていなかったかもしれない。でも胸に手を当てて誓ってもいい、シルヴィアが僕らを結びつけたんだ。

間。

125 オリヴァー　君が移住を考え始めたのはいつだろう。
126 フィリップ　移住？
127 オリヴァー　そう。海外に。言ってたよね。僕らが出会った夜。シルヴィアは言ってた、家じゅうにアフリカの本があるって。
128 フィリップ　なんだってそんな話を？
129 オリヴァー　だから、その夢を見るようになったのはいつだろう？十七歳、十八歳、いつ？もしかすると大人の男になろうとしていたころ。自分自身を見つけたころ。自分が本当は誰なのか、人生に何を求めているのか。大平原、君は思った。アフリカの大平原。悪い場所じゃない。そこにいる君が見える。この国は狭い。君にはもっと広い場所が必要だ。深呼吸できる場所。だから君は旅立つ。僕には見える。ブライトンより遠くへは行ったことがないって言っていたけれど、僕には見える、君ははるかかなたにいる。冷たい海峡を渡り、地中海を渡り、夢見たアフリカの大地に立ってる。そこで何をしてる？農業？狩り？教師？きっとそんなことはどうでもいい。そういう場所で、そういう空の下で君はとうとう発見する、自分は何のためにそこにいるのか。ひとりになってはじめて。
130 フィリップ　オリヴァー。
131 オリヴァー　じゃあ二度と会わないよ。
132 フィリップ　ああ。
133 オリヴァー　それが君の望みなんだね。
134 フィリップ　お互いにとって必要なことだ。続けること。もとの状態に戻ること。
135 オリヴァー　でも何の意味が？
136 フィリップ　意味？
137 オリヴァー　そんな馬鹿げた、苦痛な人生に何の意味があるんだ、自分に正直になれないなら？自分の芯にあるもののために闘わないなら？
138 フィリップ　わからないよ。わからない。
139 オリヴァー　僕に何かが起きたんだ、フィリップ。戻れないよ。もとの状態には。
140 フィリップ　どういう意味だ？
141 オリヴァー　大丈夫、君が来てくれるとは思ってない。僕はもう何も期待しない。君には何も。
142 フィリップ　悪かった。
143 オリヴァー　君は軟弱だ、フィリップ。
144 フィリップ　僕はべつに……
145 オリヴァー　何？
146 フィリップ　だからってべつに……
147 オリヴァー　言って。
148 フィリップ　いい。何でもない。
149 オリヴァー　頼むから言って。
150 フィリップ　楽じゃないんだ。楽じゃない。

間。

151 フィリップ　出会わなきゃよかった。シルヴィアが君を連れてこなきゃよかった。
152 オリヴァー　君は誰だ？
153 フィリップ　わからない。もうわからない。
154 オリヴァー　わかったことなんか一度もない。いまがそれを知るチャンスだった。君には強さが足りないんだ。死ねばいいよ。フィリップ。自分が誰だか知らないままで。
155 フィリップ　黙れ。
156 オリヴァー　まったく愚かで、哀れな人生だよ。

突然、フィリップはオリヴァーの顔を殴る。反射的な、窮地に追い詰められた動物の反応である。オリヴァーは後ずさるが、フィリップも同じく動揺している。オリヴァーの口からすこし血が出ている。

157 フィリップ　ごめん。あぁ、こんな、本当にごめん、オリヴァー。本当にごめん。

オリヴァーに近づく。オリヴァーはひるむ。

158 フィリップ　見せて。

オリヴァーは任せる。

159 フィリップ　ごめん、本当にごめん、本当に。

160 オリヴァー　心配いらない。大丈夫。

161 フィリップ　本当にごめん。そんなつもりは……本当にごめん……

162 オリヴァー　大丈夫。本当に、大丈夫だから。

するとフィリップは泣き始める。オリヴァーの腕のなかにくずおれ、子供のように泣きじゃくる。

163 フィリップ　ごめん、ごめん、ごめん。

164 オリヴァー　心配いらないよ、フィリップ、心配はいらない。

オリヴァーはフィリップをなだめる。そしてキス。オリヴァーはやさしさを保とうとする。フィリップが何かほかのものに取りつかれる――何か差し迫った、攻撃的なものが沸き起こる。

165 オリヴァー　待って、フィリップ、待って。

166 フィリップ　いやだ。

もみ合いのようになり、フィリップがオリヴァーをソファの方へ引っ張る――動作はますます乱暴になる。相手と自分の服を引きはがす。

167 オリヴァー　だめだよ、フィリップ。こんなのは。いまは。ここでは。待って。

168 フィリップ　いいじゃないか。いま、ここで。こうなることが望みなんだろう？僕にこうなってほしいんだろう？

フィリップは乱暴になっている。オリヴァーを組み敷く。オリヴァーは抵抗する。フィリップはズボンのジッパーを開け、オリヴァーのズボンをどうにか半分ずり下ろす。オリヴァーの背後から挿入する。オリヴァーははじめ抵抗するが、やがて屈服する。フィリップはほどなく絶頂に達して射精し、オーガズムの瞬間、おそろしく苦悶に満ちた解放の叫びを上げる。二人はしばらく床に横たわっている――フィリップは恥にまみれて顔を隠し、オリヴァーも顔を隠す。

とうとうフィリップが立ち上がる。静かに、ていねいに服を着て、部屋を出る。オリヴァーは動かない。横たわったまま、床に顔を伏せている。一分ほどしてフィリップが戻ってくる。自分の酒を注ぎ、座る。タバコに火をつける。いっときが過ぎる。

ゆっくりと痛々しく、オリバーは立ち上がり、乱れた服を着直す。完全な静寂のなか、

一、二分が過ぎる。

オリヴァーはゆっくり部屋を歩き、コートかけへ向かう。自分のコートを見つけ、それを着る。フィリップのことは見ない。うつむいている。玄関へ向かう。ドアを開けると、立ち止まる。

間。

169 オリヴァー　君のこと、わかってるつもりになってた。

部屋を出ると、ドアを閉めて去る。
フィリップは動かない。座ったまま、ウィスキーを飲み、タバコを吸う。
照明が徐々に溶暗する。

一幕終わり

第6場　二〇〇八年

オフィス。デスクの向こうにピーターが席を取る。ややうさんくさい商売人である。オリヴァーはデスクの向かいに席を取る。

1 ピーター　でセバスチャン・ニコルズに訊いたらさ、「優秀なクィア・ライターを探してるなら、街いちばんのを知ってる」って言うんだよ。これって大丈夫？ つまり、こんな言葉使うのってさ、「クィア」って言葉、大丈夫？ 傷つけたくないからさ。

2 オリヴァー　傷つきませんよ。

3 ピーター　だってわかんねーじゃん？ つまり、自分が正しい言葉使ってるかどうか。てゆーか、いまさらポリコレなんて古いっていうのはわかってる――何だよそれ？って――でも俺は好んで人を傷つけるようなやつじゃない。要はさ、何が正しい言葉かなんてわかんないってこと。おたくらをクィアって呼ぶのはさ、黒人を「ニ」で始まる言葉で呼ぶのと同じかもって思ったわけよ。仲間内ではいいんだろうけど、でも……

4 オリヴァー　クィアは大丈夫です、クィアは。

5 ピーター　境界線を押し広げる、とにかくそういう話。もしかして見たかな、うちで載せたイラクの記事。

6 オリヴァー　いえ、見逃しました。

7 ピーター　あるガキンチョが戦争から戻って両腕なくしちゃってんの。そいつを一週間追っかけた、日記風ってゆーかさ、どんだけ生活が変わったかとかクソほど苦労してるとか、彼女にふられちゃったとか、あとつまんねーことも、日常のこと、ＡＴＭ使うとか、どっからどっかまでたどり着くとか、めちゃ感動だよ、つーか、みんなの心のスイッチ押して考えさせる。パワフル。

8 オリヴァー　でしょうね。

9 ピーター　だって人生大事でしょ、オッパイとケツ、オッパイとケツ、オッパイとケツ、おまけ程度にサッカーとか、その程度じゃ困るんだよ。一晩で意識高い系の雑誌になろうってわけじゃないけどさ、うちには幅広い読者がいるし、たいてい感度のいいガキンチョなんだ、やつら言うじゃん、力には責任がともなうとか。

10 オリヴァー　言いますね。

11 ピーター　だって要はさ、そういうガキンチョって、たいていセックス大好きなわけ。マジで、たいていのやつはブタともやっちゃうよ。で何が言いたいってさ、「時代は変化してる」ってこと、いや、ほんとだよ、マジで。こないだ夜みんなと遊びに出てさ、一人が、デイヴって名前の、若干クソ野郎だけど悪いやつじゃない、そいつが二、三杯やって、タイに行ってきた話すんの、彼女ホテルに放ったらかして、シャングリラかどっかに泊まってやがんだけど、街歩いてるうちにムラムラしてきて、ありがちでしょ、で気づいたらニューハーフにチンチンしゃぶってもらってたんだって。ニューハーフだぜ。その話にみんなドン引きで「はぁ？」って、そしたらデイヴ、「生涯最高のフェラだった」って、みんなからかったり笑ったりしてんだけど、二分経つとビリヤードに戻って忘れてるんだ。十年前なら絶対ない、時代は変化してる、デイヴだって秘密にしてた。けどさ、いまどき誰が気にすんの？ だから、結局のところ、オリヴァー、下品に聞こえたらごめんね、問題あれば遠慮なく言って。

12 オリヴァー　大丈夫です。

13 ピーター　俺はこう思ってるわけ、押せ押せで行こうぜ、こわいもんなんてない、結局みんな人間なんだし、結婚とかしなくていいじゃんよって。いまこそガキンチョどもに言ってやんないと、そういうので興奮してもオッケーだぜ、ゲイってクールだろとか、自分のなかのホモフォビアとガッツリ向き合え、乗り越えろとか。そこで記事にしたいのが、ゲイのセックス・ライフ、細かいことはいいからざっくりと？ 公共の場所でのセックスとかそういうの、読者がちょっ

とうらやむようなさ、たとえば、そうだな、公園や公衆トイレに足を踏み入れてみよう、昼でも夜でもいつでもいい、そしたらそこには超かわいい女の子が勢揃い、ただハメてもらうのを待ってる、どうだこれってすげーだろ？みたいなさ。ゲイのセックス・ライフをストレートの男たちに。

14 オリヴァー　ゲイのセックスライフをストレートの男たちに。

15 ピーター　で、ぜひとも俺がほしいのは、やつらが自分を見出して、同時に「ゲイでもオッケー」ってなる記事。考え方を変えるような。ゲイはクール。そんな感じの。ゲイの男はみんなわかってる、自分が何を求めてるか、それをどうやって手に入れるか。あらゆる分野のイノベーター——音楽、ファッション、野外乱交。それを雑誌に載せるだけで——世に出すだけで——読者の意識を変えられる。ガキンチョ向けの雑誌がみんなゲイのセックスを取り上げるわけじゃないからさ。これがはじめに言ってたことよ——バリアをぶち破る。

16 オリヴァー　はい。

17 ピーター　基本的に俺が言ってんのは、俺のビジネスが社会にとって正しいことと両立できれば、それはいいことなわけ。なかでもバリアをぶち破るっていうのは超大事。おたくらそれに超ふさわしいから。

間。

18 ピーター　いやつまり、おたくら権利を求めてめっちゃ闘ったわけじゃん。クソな社会と闘ったんだ。クソほどの無知と。

19 オリヴァー　たしかに。

20 ピーター　実はオリヴァー、俺だってさ、個人的なつながりがあるんだ。いやつまり、ゲイの世界に。ゲイの運動ってゆーかさ。おじさんがいるんだ。

21 オリヴァー　みんないますね。

22 ピーター　いや、でもマジで。すげーおじさん。マジかっこいい。お袋の兄貴よ。ハリーおじさん。マジいい人で。思いやりがあって。ハエも殺せない。市会議員だった。エイズになっちゃった。お気の毒です。

23 オリヴァー　脳裏に焼きついてるよ。べったりと。あの日。最後に会ったとき。もう死にかけてた。そんとき俺は、えっと？十二か十三でさ。お袋が俺と弟を入院先のロイヤル・フリー・ホスピタルに連れてくんだ。特別病棟で医者もなんだかわかってない、いや、エイズなのはわかってたけど初期のころで、つまりよくわかってなかったんだ、うつる病気なのか、どうやってうつるのか、だからお袋はグラス捨てたり、おじさんがうちにきたとき使ったやつね、もちろん本人の前じゃなくて帰ってから、アホかと思うけど、当時はよくわかってなかったから。で病室に行くと、ハリーおじさん、変なシート的なものをかぶってる、なんか特別なシートで、配線とか点滴のチューブとかいろいろ通してあって。えれーことになってる。人工呼吸器もつないであった、息もろくにできないから、その音がさ、頭ヤバくなるくらい、ぜえぜえ言って、いかにも死ぬって音なんだ。見たことねーよ。でちょっと変なのがさ、俺身を乗り出して、状況にちょっとビビってたら、お袋が言うんだ、「ハリーおじさんに『こんにちは』でしょ」、でもそれってさ、「ハリーおじさんに『さよなら』でしょ」って意味なわけ、先は長くないってみんな何となくわかってた、だから俺はかがんで、シート的なものが邪魔なんだけど、のぞき込んだら。ヤベーよほんと。マジヤベー。おじさんの目が。なんつーか、ほかの部分は死にかけてんのに目だけはさ。心ののぞき窓っつーか。そういうの。目から愛があふれちゃって。マジで心つぶれちゃうよ。

間。

25 ピーター　で帰ろうとすると、野郎が一人座ってた、一メートルほど離れて、こっち見てにっこりする

もんだから、「誰だよお前？」って感じでさ、だって俺まだ十二歳かそこらだし、よくわかんないまま、お袋になんかぐいっと手ぇ引かれて出てきたわけ、であの人誰って訊いたらさ、「あれはハリーおじさんのお友達」って。そのあと知ったんだけど、二人は二十五年間いっしょに暮らしてた。二十五年だぜ。それってめっちゃ長いだろ。つまり、めっちゃマジな関係だよ。だからお袋に訊いた、なんでそれまで会ったことないのか、ハリーおじさんの友達なのにどうしてか、お袋はちゃんと答えてくれなかった。「会ったことがないだけよ」って。人って変だよ。

間。

26 ピーター　そう、それが俺の個人的なつながり。つまり、ゲイの世界との。ハリーおじさん。だから敬意を示したくて。

27 オリヴァー　ありがとうございます。その、話してくださって。

28 ピーター　だから俺が思うに、オリヴァー、まずはこうやってしゃべれてよかったよ、メールでもうすこしアイデア送る。どんな記事がいいか。でも肝心なのは重くならないこと。そしてちょっと興奮させる。

29 オリヴァー　興奮させる。

30 ピーター　あとカネのほうは大丈夫？

31 オリヴァー　四千で。

32 ピーター　前払いで二千。

33 オリヴァー　はい。

34 ピーター　仕上がったら二千。

35 オリヴァー　わかりました。

暗転。

第7場　一九五八年

公園。ベンチが一脚ある。照明が入るとオリヴァーとシルヴィアがいる。二人は立っている。秋の午後である。

1 シルヴィア　来てくれてありがとう。
2 オリヴァー　こちらこそ。久しぶり。
3 シルヴィア　変に思ったかもしれないわね、ここで会おうなんて。公園で。でもこんなに穏やかな陽気だし、すべてがこんなにも……
4 オリヴァー　こんなにもきれいだし。
5 シルヴィア　それにわたし、そとに出る必要があったの。最近はほとんどうちにいたから。たまに忘れてしまうの、そとに世界が広がってること。ほかにも人がいること。
6 オリヴァー　ここで会うのは素敵だよ。
7 シルヴィア　それにフィリップはほとんどうちにいない。忙しいの。急に仕事に追われてしまって。だから出かけるのはいい。
8 オリヴァー　元気そうだね。
9 シルヴィア　そう？

間。

10 シルヴィア　このあいだ書店の前を通ったの。ウィンドウにわたしたちの本があった。ほんとに誇らしく思えたわ、一瞬。ほんとに、とっても誇らしく。
11 オリヴァー　それはそうだよ。
12 シルヴィア　また一緒にやれたらと思うの、オリヴァー。厚かましいことじゃないでしょう？
13 オリヴァー　ちっとも。
14 シルヴィア　お願いしてるの、わたし。勇気を振り絞って言ってみた、わたしには大切だったから。
15 オリヴァー　もちろん、またいっしょにやろう。
16 シルヴィア　がっかりしたんじゃないかしらって。
17 オリヴァー　がっかり？
18 シルヴィア　あぁ、ほら。仕上がったとき、本が無事完成したとき、あなたの期待に届かなかったんじゃないか。がっかりしたんじゃないかって。わたしの仕事に、わたしが果たした役割に。
19 オリヴァー　ちっとも。
20 シルヴィア　最初の期待に届かなかったんじゃないかって。
21 オリヴァー　そんなふうに考えちゃいけない、決して。僕は最高に満足してる。
22 シルヴィア　わたし理由がないか探していたのね、なぜわたしたち長いこと会わなかったか。
23 オリヴァー　僕がとても忙しかったから。
24 シルヴィア　それはそう。
25 オリヴァー　間違った印象を与えてしまったなら謝るよ。そんなの真実からは程遠い。
26 シルヴィア　ありがとう、おかげで安心した。どこか神経質になっていたのね、そんなはずないって自分に言い聞かせようと。

間。

27 シルヴィア　きっとフィリップは、わたしがすっかり狂ってしまったと思ってる。

間。

28 シルヴィア　あなたの友情がわたしにはとても大切なの。
29 オリヴァー　大丈夫、シルヴィア？
30 シルヴィア　芝居をやっていたころは、こういうつながりを感じられる人がいた。率直に話せる人がいたの、すごく大事で興味深いことを、もしかすると個人的なことも。ほかの人には話せないこと。フィリップにさえも。フィリップにだけは。
31 オリヴァー　演劇の世界っていうのはね。
32 シルヴィア　それからあなたと出会って同じものを感じた。わたしたちはくだらない世界の人間じゃない、愚にもつかないおしゃべりをして、人の尊厳を傷つけたりしない。気心の合う人。何でも遠慮なく話すことができて、何でも遠慮なく話してくれると思える人。

座る。間。

33 シルヴィア　わたし孤独なの。

間。

34 シルヴィア　こんなこと言うなんてひどい？
35 オリヴァー　ちっとも。
36 シルヴィア　だって。結婚してるのよ。わたしは夫と暮らしてる。なのにときどき夜中に目が覚めて、ベッドの上で思うの、なんて孤独なんだろうって。その孤独は毛布のようなもの。心地いい毛布じゃない。もっと暗いもの。重苦しい。かぶると息が詰まりそう。本当にごめんなさい。
37 オリヴァー　ごめんなさいって？
38 シルヴィア　呼びつけたこと。うちで何か書いてたんでしょう、せっかく集中していたのに、公園に呼び出されて、狂った女の愚痴を聞かされるなんて。
39 オリヴァー　君は狂ってなんかいないよ、シルヴィア。
40 シルヴィア　なにか疑いをもつことがある。そんなとき人は忘れようとする。どこかでわかってはいても、認めてしまうと人生がうそになってしまう。すると……
41 オリヴァー　すると？
42 シルヴィア　するとずっと頼りにしていた土台が、歩いていた地面、自分のために建てた家、何もかも、壁も家具も吸ってる空気も何もかも、現実とは思えなくなる。そして真実にまぎれたうそを見分けられなくなる。少なくとも真実ではないとわかっているものを。見せかけのものを。人生はおそろしい仮面舞踏会のようになる。そのことに耐えられなくなる。

間。ゆっくりと、シルヴィアは鞄のなかの何かを捜し始める。

43 シルヴィア　あなたのものを見つけたの。
44 オリヴァー　僕のもの？
45 シルヴィア　うちで。ポケットから落ちたのね。いつかしらって思ったの。あなたはうちに三回来た。最初ははじめて来たとき、あなたがフィリップに会えるようわたしたちが招待した日。イタリア料理屋に行った夜。そのあと二回。あの最終版の挿絵を見にきた朝、わたしがひどい風邪をひいて、あなたの部屋に行けなかったとき。それから最後は本の出版パーティーの夜、そのときはたったの五分、あなたが車で送ってくれて、軽くブランデーを飲んだ。だからわたしがいるときは三回だけ。当然、三回とも居間にしかいなかったし、お手洗いには行ったでしょうけど、正直それも思い出せない。

ハンドバッグからペンを取り出す。

46 シルヴィア　あなたのペン。すごく大切にしているもの。お姉さんがくれたもの。肘かけ椅子のクッションの後ろにあった。寝室の緑の肘かけ椅子。上着から落ちたのね。いつも内ポケットに入れてたでしょう？

47 オリヴァー　うん。そうだね。入れてた。

48 シルヴィア　じゃするっと落ちたのね。

49 オリヴァー　うん。

50 シルヴィア　わたしが母を訪ねていたときかしら。一週間は留守にしたものね？

間。

51 シルヴィア　どうぞ、オリヴァー。あなたのよ。あなたのペン。

オリヴァー受け取る。長い間がある。

52 シルヴィア　わかってちょうだい、わたしはあなたを責めない。本当よ。もちろん傷つくし動揺した、あなたがよりによって……わたし動揺したわ、あなたが……だってあなた、家はあるわけだし、自分の家があるのに、よりによって……笑えるでしょ？ 何よりもそのことに取り乱すなんて。きっとそれしかなかったのね、この件について意外だったことは。あなたがあの場所を選んだこと。おかしい。

間。

53 シルヴィア　それでもね、わたし考えてみたけど、それでもあなたを責めたりしない。うそで固めた日常を、いつわりの日常を送っていれば、細かいことはぼやけていくものだから。分別が損なわれていく、ということなのかしら。判断する力が。だから普通の状況なら、あなたはわざわざあんなやり方でわたしを侮辱したりしない。そう思いたいの。

ふと泣き始める。

54 オリヴァー　本当にごめん。

55 シルヴィア　ずっと時間の無駄だった。いまの自分を見るとね、鏡の中の、わたしの顔は、自分を忘れた、忘れられた女の顔なの。

間。

56 シルヴィア　フィリップとはまだ連絡を？

57 オリヴァー　いや。いや、取ってない。

58 シルヴィア　それを選んだのはフィリップ、あなた？

59 オリヴァー　フィリップ。僕が彼なら君と同じことを選んだ。

60 シルヴィア　わたしと同じ？

61 オリヴァー　正直な人生を生きること。

62 シルヴィア　正直な人生。

63 オリヴァー　そう。

間。

64 シルヴィア　あの人幸せだった？

65 オリヴァー　幸せ？
66 シルヴィア　教えて。あの人幸せだった？少なくともその午後は。その朝は。幸せだったの？
67 オリヴァー　僕には……それは……
68 シルヴィア　難しい。難しいでしょうね。
69 オリヴァー　うん、僕には……

間。

70 オリヴァー　もしかすると一度。ほんの短い時間。ほんのつかの間、フィリップは可能性を垣間見たのかもしれない、つまり……

ためらう。

71 シルヴィア　勇気を持つ。
72 オリヴァー　そう。それだよ。
73 シルヴィア　それを思うと憤りが込み上げた。あなたたちの幸せ。一日か二日は心底二人を憎んだわ。なぜってたとえ二、三回でも不倫してるあいだ、あなたはほんのつかの間って言ったけれど、そのときあの人は本当の自分になれたんでしょう、わたしといてもなれなかったものに。あなたの言う垣間見た瞬間に。

間。

74 オリヴァー　本当にごめん。僕は恥ずかしい。
75 シルヴィア　でしょうね。
76 オリヴァー　わたしが心から願うのは……。
77 シルヴィア　うん……
わたしが心から願うのは、あなたが自分の探しているものを見つけること。楽じゃない。わかってる。あなたも孤独なはずよ。
78 オリヴァー　うん。そうだね。

シルヴィアは行こうとするが、立ち止まる。

79 シルヴィア　あの夜あなたがはじめて来たとき、何かが起きた、そうでしょう？わたし、感じたもの。あれは何かしら。あの場に立ち込めていた。わたしもそれを感じたい。誰かにそれを感じてもらいたい。さようなら、オリヴァー。

シルヴィアはベンチにオリヴァーを残し、歩き去る。照明が溶暗する。

第8場　二〇〇八年

シルヴィアのアパート。彼女がドアを開けたところ。そこにオリヴァーがいる。口から血が出ている。

1 シルヴィア　ざけんなよ。
2 オリヴァー　もうそういうあいさつやめてくれる？　いい加減感じわりーよ。
3 シルヴィア　ったく。
4 オリヴァー　そっちのほうがいい。
5 シルヴィア　血が出てる。
6 オリヴァー　相変わらず、驚異的な観察力。
7 シルヴィア　あんた何やってんの？
8 オリヴァー　近所にいて。
9 シルヴィア　何があったの？
10 オリヴァー　事故。
11 シルヴィア　事故？
12 オリヴァー　細かい話はあとにしてくれる、お宅が血の海になっちゃうよ？
13 シルヴィア　何したの？
14 オリヴァー　切り傷だよ、たかが。キッチンペーパーで十分です、ミス・ナイチンゲール。
15 シルヴィア　座って。

オリヴァーは座る。シルヴィアはペーパーを取りにキッチンへ駆け込む。

16 オリヴァー　僕のフェアウェル・ツアー。言ってみりゃ差し入れ。大勢いるファンの一人から。でもダークな趣味の持ち主でさ。あんたって予言の天才だね、ミス・ノストラダムス。何党に投票してるやつか知らないけど、なんちゃってリベラルですらない。原始人、そう呼ぶのが正しい。ピンストライプのスーツ着て髭も剃ってるけど、絶対そう。あんなぴかぴかのレースアップ・シューズ見たことないよ。いまどき見た目じゃわかんねーわ。ほら穴から這い出したばかりには見えない。汗のにおいはぎりぎり感知したけど、まろやかなアクア・ディ・ジオの香りに紛れて。

シルヴィアがキッチンペーパーを手に駆け戻る。オリヴァーが鼻をぬぐうよう、すこし渡す。

17 シルヴィア　たしか言ってたよね、このままじゃ人生もたなくなるって。
18 オリヴァー　ちょっと見にいっただけ。
19 シルヴィア　きのうのきょうだよ。
20 オリヴァー　そんな最近？
21 シルヴィア　一週間は我慢すると思ってた。
22 オリヴァー　あんたの説得も街のデカマラの誘惑には勝てなかったんだね。
23 シルヴィア　ったく何があったの？
24 オリヴァー　僕スーツの男に目がなくて。
25 シルヴィア　明らかね。
26 オリヴァー　兆候はあったの。やり始めたら言葉責めがいつもより若干リアルで。
27 シルヴィア　どんな言葉責め？
28 オリヴァー　形容詞の使い方がすごいんだよ。名詞の使い方もぶっ飛んでて、絶句しちゃった。もちろんそれだけじゃないけどね、なかなか言葉返せなかった理由は。

29 シルヴィア　さようでございますか。
30 オリヴァー　で、絶頂を迎えたとたん、そいつ、僕のことを押してきて。何てゆーか――邪魔だ、急用があるんだみたいな、友達が待ってるとか、女房連れてディナーとか、スーパーが閉まるとか。そんなようなこと。ぐっと押されただけ。
31 シルヴィア　血が出てんだよ。
32 オリヴァー　ロレックスだね。なんかじゃらじゃらしたもの。上くちびるに残念な角度で入っちゃった。でも押されただけ。パンチじゃない。
33 シルヴィア　なら、いいけどさ。
34 オリヴァー　ゆえに「事故」って言葉を使いました。何が何だかわからないうちに向こうは仕事に戻ってた。
35 シルヴィア　もし気づいてれば、愛車のジャガーでうちまで送ってくれたろうね。
36 オリヴァー　間違いなく。

間。

37 シルヴィア　ざけんなよ、オリヴァー。
38 オリヴァー　リサーチだよ。
39 シルヴィア　「リサーチ」？
40 オリヴァー　不特定多数とのセックスについての記事。なぜか僕に白羽の矢が。

間。

41 オリヴァー　ゲイの同胞の大群に囲まれるっていえばさ、明日の件だけど。
42 シルヴィア　プライド？
43 オリヴァー　うん。僕、行かない。イタリア人に謝っといて。
44 シルヴィア　来るでしょ。
45 オリヴァー　行かないマジで。一日ベッドで過ごすつもり、傷を癒さないと。
46 シルヴィア　フィリップも誘ったよ。
47 オリヴァー　うそつき。
48 シルヴィア　彼、寄ろうかなって。わたしのためって言ってたけど。あんたも来るって伝えたよ。かまわないって、お互い大人だし、何とかなる。そんなようなこと。
49 オリヴァー　それ本気で言ってる？
50 シルヴィア　なんでわたしがうそをつく？
51 オリヴァー　容赦なく目的を遂行するタイプだから。
52 シルヴィア　フィリップは来る。よかったら来な。それかベッドに引きこもって考えてれば、孤独と死について。
53 オリヴァー　それはどうも。
54 シルヴィア　知らせてよ。お弁当の支度があるから。
55 オリヴァー　だいたい時代錯誤だよ。ピチピチのTシャツとか羽根飾り背負(しょ)ったドラァグクイーンとか。何でもいいけど、あれって意味あんの？教えてよ。あれってデモンストレーション、セレブレーション、それともファッションショー？
56 シルヴィア　あまのじゃく。
57 オリヴァー　一万人のおネエが腕の太さ褒め合ったり。マジでだっせーわ。

間。

58 オリヴァー　ところできれいじゃん。

59 シルヴィア　ありがと。
60 オリヴァー　みんなでパーティー？
61 シルヴィア　一人。単数。そのとおり。
62 オリヴァー　あっそ。
63 シルヴィア　ディナーに来るの。
64 オリヴァー　お料理中？
65 シルヴィア　そう。
66 オリヴァー　いいにおい。
67 シルヴィア　ありがと。
68 オリヴァー　まさかイタリアンじゃないよね。マンマの料理と比べるよ。あいつらみんなそう。
69 シルヴィア　そうなの？
70 オリヴァー　イギリスのもんにしときな。冷凍のグリーンピースとかそういうの。
71 シルヴィア　そろそろ来るんだけど。
72 オリヴァー　興奮するー。

間。

73 オリヴァー　で、他に何か言ってた？
74 シルヴィア　フィリップ？
75 オリヴァー　ううん、エルトン・ジョン。うん、フィリップ。
76 シルヴィア　本の話をした。
77 オリヴァー　本？
78 シルヴィア　いま読んでる本のこと言ってた。何かハンガリーの。
79 オリヴァー　でも僕のことは何も言ってなかった。
80 シルヴィア　何にも。さっき言ったことだけ。会うのはかまわないって。

間。

81 オリヴァー　ざけんなよ。僕のスイッチの入れ方わかってる。
82 シルヴィア　当然でしょ。
83 オリヴァー　僕が行くってわかってる。
84 シルヴィア　当然でしょ。
85 オリヴァー　また会いたい。いっしょにいたい。
86 シルヴィア　フィリップは特別だよ。ふところが深くて、正直で、いちずで。
87 オリヴァー　心底思いやりがあって。
88 シルヴィア　おまけにハンサム。

間。

89 オリヴァー　たまに……
90 シルヴィア　何？
91 オリヴァー　こういうのって、ない？
92 シルヴィア　どういうの？
93 オリヴァー　ちょうど眠りに落ちるとき、夢が始まる直前。それかたぶん目覚めた直後、目はひらいてるけど、意識はまだ夢のなかにいるとき。
94 シルヴィア　何？
95 オリヴァー　人生のはかなさに愕然とすること。はかなさ。気まぐれ。まるで花火。

96 シルヴィア　それはある。
97 オリヴァー　そういうとき感じるんだよね、たった一つ大事なことは意味を見つけることだって、理由をね、はかなさにビンタ食らわす何かを。自分はここにいたって言うために。存在したんだ。いたんだって。たぶんその方法は二つしかない——仕事、それから人との関わり。どれだけ人を変えたか。どれだけ変えてもらったか。どれだけ踏ん張ったか。お互いに。せめて精いっぱいやってみたか。それで花火の美しさは決まる。
98 シルヴィア　アーメン。

間。

99 シルヴィア　でどうすんの？
100 オリヴァー　どうすんのって？
101 シルヴィア　できることは一つしかない。
102 オリヴァー　つまり？
103 シルヴィア　やめるんだよ、そういうやつのブツをくわえるのは。
104 オリヴァー　誰のブツ？
105 シルヴィア　あんたを抑圧する男のブツ。
106 オリヴァー　それは深いわー。
107 シルヴィア　ナチス＝ロレックス系の男。
108 オリヴァー　生涯学習講座みたい。「ふしだらな同性愛者のためのマルクス理論」。
109 シルヴィア　でも近い将来ファシストのブツを口から出して、そいつを見上げて言うの、たとえば——
110 オリヴァー　「ねえ聞いて」——
111 シルヴィア　「ねえ聞いて、ご立派なイチモツにはたまげたけれど、決めました、何十億年前、魚の先祖が暗黒の海底から這い出たときのような、ちょっとした気分、これからはあたくしくわえるイチモツは選びます——
112 オリヴァー　ソーシャルワーカーかヨガのインストラクターにします——
113 シルヴィア　正義、平等、互いに尊敬し合う精神、そういうものを持ち合わせた人、せめてそう思える人にします。そういう進化の飛躍が必要なんです、そうしなければ神様はあたくしにどのような末路を用意することでしょう？」
114 オリヴァー　ドブのなか。檻のなか。実存的恐怖のボンデージマスクで窒息死。

間。

115 シルヴィア　解決してよかった。じゃわたしそろそろ……
116 オリヴァー　そろそろ何……
117 シルヴィア　マリオが来るころだから支度とかね。いろいろと。
118 オリヴァー　帰れってこと？
119 シルヴィア　いや、まあ、一杯だけ飲んでマリオに会ってくのはかまわない、けど……
120 オリヴァー　けど何？

間。

121 シルヴィア　つまりはこういうこと。いてあげるのが楽しくないってことじゃない。たまにはね。実際いてあげてるし。
122 オリヴァー　たまには？
123 シルヴィア　わたし余裕が必要なの、オリヴァー。しかも今晩だけのことじゃなくて。
124 オリヴァー　余裕？どういう意味、余裕が必要って？

疑問が宙づりになる。

125 オリヴァー　じゃ、とっとと消えますよ。
126 シルヴィア　あんたがここにいるとね、何となく支配されちゃうから。
127 オリヴァー　「支配」？
128 シルヴィア　魅力ってゆーか、あんたのカリスマ、あんたの存在感。
129 オリヴァー　それってひとさじのお砂糖のつもり？
130 シルヴィア　だから今夜はそんなふうにここにいてほしくないの。わたしほんとに、ほんとに好きな人と出会えたから――
131 オリヴァー　追い出しかよ。
132 シルヴィア　だから圧倒的に思うわけ、これからはちょっと、あんたのことより彼のことに集中しようって。
133 オリヴァー　追い出しですか。
134 シルヴィア　悪いことじゃないと思うし。
135 オリヴァー　僕たち終わったね。
136 シルヴィア　お互いにとって。

間。

137 シルヴィア　はい。言っちゃった。

ブザーが鳴る。

138 シルヴィア　ヤベ。
139 オリヴァー　明るい未来だ。
140 シルヴィア　もう来ちゃった。
141 オリヴァー　じゃ、消えますよ。
142 シルヴィア　いて。一杯だけ。そしたら帰って。
143 オリヴァー　ぜんぜん歓迎されてないもん、新郎新婦にプレゼントされたコンドームみたい。

シルヴィアはドアへ急ぐ。そして立ち止まる。

144 シルヴィア　でも明日は来て。公園に。たぶん……
145 オリヴァー　たぶん何？
146 シルヴィア　たぶん大事だと思うから。それにそう、全部引っくるめたものだから。デモンストレーション。セレブレーション。ファッション・ショー。でもいま言った順番で。
147 オリヴァー　陪審員は審議中。ほら、さっさと開けてやんな。

シルヴィアは部屋を駆け出る。オリヴァーはその場に残り、一人きり。考え込み、何かを思い出そうとしているようである。目を閉じ、そしてささやくように――

148 オリヴァー　フィリップ。

第9場　一九五八年

診察所。シンプルである。机一脚、椅子二脚、もしかするとヘッドレストつきの検査台も。医者とフィリップが対面して座る。

1 医者　いつですか、はじめて同性の人間に性的魅力を感じたのは？
2 フィリップ　どうだろう……おそらく……
3 医者　思春期、それともそのあと？
4 フィリップ　おそらく思春期です。たぶん……十三歳かそれくらい。学校で。でももちろん……その、そういう年齢ですからね。よくわかってなかった。こわかったんだろうな。よくわかってなかった。考えないようにしたんです。あえて考えないように。
5 医者　手引きは受けました？
6 フィリップ　失礼？
7 医者　手引きを受けたことは？ 子供時代か思春期に。同性の大人から。年上の男性から何らかの性行為に誘われましたか？ 家族や先生、もしかすると知らない人から。
8 フィリップ　いえ、そんなことは。わたしはまったく……
9 医者　おわかりでしょうが、絶対的に必要なのはこれらの質問に真実をもって答えることです。
10 フィリップ　ええ。もちろん。
11 医者　どの質問にも、まったくもって正直に、勇気をもって答えないことにはわたしの時間もあなたの時間も無駄になります。ためらいはすべて脇に置くこと。
12 フィリップ　誘いはありません。手引きもです。誰からも。
13 医者　で、記憶では十三歳ごろに、はじめて同性の人間に性的魅力を感じたと。
14 フィリップ　そのころです。
15 医者　自分とその男の子について性的な空想にふけったことは？
16 フィリップ　いっしょにいて感じたのは……彼のそばにいたとき。強くて圧倒的な魅力を。
17 医者　ペニスは勃ちましたか？ つまり、興奮しましたか？
18 フィリップ　おそらく。どうだろう。全部が、なんというかつながっていました。何もかもが。
19 医者　「つながっていた」。どういう意味です、「つながっていた」とは？
20 フィリップ　いや、たしかに体が何か感じたけれど、でもそれは……
21 医者　その男の子とは何らかの性行為を？
22 フィリップ　そんな、まさか。わたしは……本当に知らなかったんです、まさか自分以外に……自分以外にそういう感情をもつ人間がいるとは。振り返ってみるとお互いそうだったのかもしれません、でもそのときは。
23 医者　どんな空想にふけったか説明してください、ご自分と、その夢中になったという男の子について。
24 フィリップ　わかりません。いっしょにいるところとか。肉体的に。
25 医者　肛門に挿入することは？
26 フィリップ　わかりません……たぶん。もしかしたら。
27 医者　空想のなかで自分が性的に受け役だったか攻め役だったか、覚えていますか？
28 フィリップ　本当に思い出せません。いっしょにいたいと思ったことは覚えています。肉体的な意味で。でも細かいことまでは。敢えて忘れようとしてきたんだと思います。はっきりしません。

間、医者は目の前にある何枚かの書類に目を通す。

29 医者　ここに最近一人の男性と性的関係をもったとありますね、数ヶ月に渡って続いたと。
30 フィリップ　そうです、はい。

31 医者　その関係では肛門を使ったんですね。
32 フィリップ　はい。はい、そうです。
33 医者　その男性とは何回性行為をしましたか？
34 フィリップ　その、それは……その、四ヶ月に渡って。
35 医者　その四ヶ月のあいだ、何回性的に親密な関係をもちました？
36 フィリップ　いや、何とも言いにくくて。たぶん平均して週に二、三回。
37 医者　で何がその……関係を終わらせたんですか？
38 フィリップ　僕です。僕が終わらせました。
39 医者　一致協力して、二人が共有する性癖と闘った。
40 フィリップ　はい。
41 医者　その男性とは連絡を絶っていますか？つまり、彼を生活からしっかり遠ざけることができていますか？
42 フィリップ　はい。
43 医者　頭のなかから消し去っていますか？
44 フィリップ　はい？
45 医者　頭のなかからしっかり彼を消し去っていますか？性的な空想を。
46 フィリップ　ええ。どうにか。
47 医者　その関係が終わって以来、べつの男と性行為をしたことはありますか？
48 フィリップ　いいえ。いいえ、ありません。

間。

49 医者　これは過酷な治療です、それは間違いありません。まずはお祝いを申し上げます、あなたがしかるべき手を打って今日ここへいらしたこと。きっと楽ではなかったでしょう。いまざっとお話しした感じと、デイヴィーズ先生にうかがった話からして、大変苦労されたはずだ。しかしこの厄介な敵、この倒錯との闘いはあなたの人格形成において不可欠な部分を占めている。あなたも同意されるでしょう。

フィリップは何も言わない。

50 医者　必要なものは持参されましたね。
51 フィリップ　はい、持ってきました。着替え。歯ブラシ。
52 医者　よろしい。すぐ看護婦がお部屋へ案内します。目的は治療のあいだずっと部屋にいることです。そうですね、少なくともあすの朝までは。
53 フィリップ　わかりました。
54 医者　部屋はシンプルです。禁欲的。持ち込み品はなし。ベッド一台。以上。窓もなし。事前に歯を磨くといいでしょう。それからご自分のパジャマに着替えて。もちろんふさわしいものは提供できますが。着るものなら。
55 フィリップ　パジャマを持ってきました。
56 医者　よろしい。

間。

57 医者　部屋に写真があります。写真集が何冊か。ぜひともそれを見てください。ポルノ的なものです、同性愛的内容の。約一時間、部屋に一人きりでいてもらいます。そのあいだできるだけ写真を見ましょうか。きっと興奮するでしょう。

間。

58 医者　一時間後、午後九時ごろに看護婦がうかがって注射をします、アポモルフィネをたっぷりと。嘔吐を誘発する薬です。注射から十分か十五分経つと気持ち悪くなるでしょう。強烈な吐き気、ひょっとすると目まいも。この治療を受ける患者さんはたいてい洗面器や吐くもの、何らかの容器を欲されました。しかしわたしの発見では、治療が最も効果を上げるには、そういうものを提供しないのがいちばんです。部屋のなかに吐けば、自分の吐いたものに囲まれたまま、朝まで治療を続けることになりますから。注射をしてひとしきり吐いたあと、肝心なのはポルノ写真を見続けること。二時間したら、また看護婦がうかがって二回目の注射をします。これが朝まで三回くり返される。そして注射の合間にはぜひ、提供されたポルノ写真を見続けるのがいいでしょう。これで治療の効果が上がり、成功の可能性が増すわけです。

間。

59 医者　何か質問は？

60 フィリップ　はい……僕は……デイヴィーズ先生に聞いたんですが、いくつか事例が。特定の個人が関わっている。

61 医者　あぁ、ええ。これまでも何人か同じ治療を望まれました。つまり、ある特定の個人が……

62 フィリップ　はい。

63 医者　写真は持参されましたね。その人物の。

64 フィリップ　はい。持ってきました。

65 医者　そう。まあ、それならまったく簡単です。写真を持って入ってください。その人物の。それを取り入れます。治療に組み入れます。ほかの写真といっしょに見るんです。よくある依頼です。

66 フィリップ　はい。

間。

67 フィリップ　ですが、先生……

68 医者　はい？

69 フィリップ　わたしが知りたいのは……他のこと。他の気持ち。つまり、性的なものに限らない感情。

70 医者　ええ。

71 フィリップ　そういうのは……いつかは……

ぎこちない間がある。

72 医者　看護婦は準備できています。朝またお会いしましょう。

73 フィリップ　はい。

74 医者　ほかにはありませんね？

75 フィリップ　ええ。ええ、ありません。

フィリップ立ち上がる。

76 医者　ところで……

77 フィリップ　何です、先生？

78 医者　ここへいらした理由をうかがっても？ 何をきっかけに来ようと決心されました？ 研究上重要なことなんです。

間。

79 フィリップ　忘れるために。
80 医者　忘れるため？
81 フィリップ　もっと楽に生きたくて。
82 医者　みんなそうでしょう？
83 フィリップ　そうですね。

暗転。

第10場　二〇〇八年

公園のベンチ――前と同じベンチである。シルヴィアがオリヴァーと二人で座っている。二人はシャンパンの栓を抜いたところであり、フルートグラスで飲んでいる。背景からはプライド・パーティーの喧噪がいろいろと聞こえてくる――口笛、叫び声、音楽。セレブレーションの音。

1 シルヴィア　で、バスに乗ってたら、一人ブロンドの女の子がね、十五歳くらいでおっかなくて、熱烈なファンクラブに囲まれて、その子でっかい声で二言目には「ゲイ」って言うの。それってゲイ、あれってゲイ、何もかもゲイ。その歌ゲイだわー、あのドラマってゲイだわー、このサンドイッチ、ゲイだわー。だからわたしちょびっと勇気を出して振り向いて、高圧的にならないよう言ったの、「すみません……」

2 オリヴァー　申し訳ありません。

3 シルヴィア　申し訳ありません、でもお願いします、そういう文脈で「ゲイ」って言葉を使わないでくださいますか……

4 オリヴァー　ゲイ、イコール、ダサい。水準以下。

5 シルヴィア　せめてよく考えてからにしてください、あなたにはちょっとわからないのかもしれないけど、傷つく人が大勢いるしわたしも不愉快です。

6 オリヴァー　よく刺し殺されなかったね？

7 シルヴィア　でその一時間後、ジェニファーの家でディナーしてて――

8 オリヴァー　あんな子とよくいつまでも友達でいるわ……

9 シルヴィア　――同性婚の話になったのね。そこにハリーとかいう男がいて言うの、だいたいこんなようなこと。「ま、遺産相続の問題はもっともだろうけど、それ以外のことはあいつら関心ないだろ」って、どういう意味よ、「だってさ、やつらのほとんどは楽しくやりたいだけだろ」って、そしたらソーニャまで話に加わってきてさ、これはそのまま引用するね、「あたしの親友も何人かゲイだけど」……

10 オリヴァー　元彼もほとんどね。

11 シルヴィア　「なんで結婚する必要があるんだろうね、てかパートナーシップで十分じゃない？」、そしたらまたハリーが出てきてさ、「だいたい誰が結婚なんかしたがんの？」って、「公園で盛り合ってりゃいいじゃん、俺ならそうしたい。」、そしたらみんな大爆笑、そこでわたし立ち上がったの。両足でしっかり立ち上がって……

12 オリヴァー　片足じゃかっこわりーもんね。

13 シルヴィア　言ってやったの、「ハリー、彼らの多くが公園にいた理由はそもそもうちに居場所がなかったからなんだよ。追放の身だったの。」

14 オリヴァー　「追放の身」。いいわーそれ。

15 シルヴィア　だけどそいつら見てたらさ、バカではないの、てゆーか、想像力がちょっと足りないんだろうけど必ずしもバカとは言えないわけ、で考えたんだよね……

16 オリヴァー　考えたって何を……？

17 シルヴィア　うーん、わかんない。でも考えたの、オリー、これまでにどれだけの闘いがくり広げられたか。何と闘ってきたのか。ヘイトだけじゃない、他にもある、もっと静かだけどなかなか消えないもの。あんたが何者であるか決めつける世界。あいつらの言うこと聞いてると、あんたをおとしめてんの。そしてどっかであんたも、オリー、あいつらの言うことを信じてる。

18 オリヴァー　僕ってだまされやすい、それはほんと。

19 シルヴィア　だからわたし考えたの、いったいどういうことのために闘いはくり広げられたのか。何のための闘いだったか。

20 オリヴァー　それは考えまくったねー。

彼女のシャンパンを注ぎ足す。

21 オリヴァー　もっと飲みな。そろそろ街頭演説は終了願います。

フィリップ登場。

22 フィリップ　下のほうまで響いてたよ。
23 オリヴァー　さすが女優。
24 シルヴィア　声でかかった？
25 フィリップ　見事にね。
26 シルヴィア　やぁだ。わたしっていかにもだわ。

間。

27 フィリップ　サンドイッチ持ってきたよ。
28 シルヴィア　オリヴァーもすこしつくってくれた。マリオは向かってる。
29 オリヴァー　具は何？
30 フィリップ　チョリソー。鴨。タプナード。
31 シルヴィア　チーズとピクルスの何が悪いのよ？
32 フィリップ　ブルーベリーもあるよ。
33 オリヴァー　うまそ。

間。

34 シルヴィア　昨日ね、マリオがまた子供の話をするの。
35 フィリップ　子供？
36 シルヴィア　「ずっと子供がほしかった」って。
37 オリヴァー　ぞっこんなの。
38 シルヴィア　わたしも愛してる。
39 フィリップ　出会ったばかりじゃないの？
40 シルヴィア　自分で歌を書くの。ギター持ってて。
41 オリヴァー　彼女が知るべきはそれで十分。
42 シルヴィア　反戦デモには必ず行ってる。本を読んで読みまくってる。
43 フィリップ　だから？
44 オリヴァー　どれもいい兆候だって言ってんだよ。
45 シルヴィア　ベッドでも最高。
46 フィリップ　大事だね。
47 シルヴィア　マリオに愛されながら思うのね……この愛から何か生まれるとしたら……この愛がそういうかたちで実を結ぶとしたら、だったらその覚悟はできてるし、それは素晴らしいことだ、てゆーか、幸運でしょ、贈りものだもん。神様からの。命って。何でもいいけど。
48 オリヴァー　赤ちゃんつくるんだってさ。
49 シルヴィア　でもそうならなくても、てゆーか、授からなくても、授からないことになったとしてもかまわない。いまわたしたちが手にしてるもので十分、ってこと。

間。シルヴィアはふと、彼らを二人にすべきだと気づく。

50 シルヴィア　わたし……アイスクリーム買ってくる。
51 オリヴァー　アイスクリーム？ランチもまだじゃん。
52 フィリップ　シルヴィアはアイスクリームがほしいんだよ、オリヴァー。
53 オリヴァー　僕も行く。
54 シルヴィア　僕も？何、僕も行くって？
55 オリヴァー　僕も食べたい。
56 シルヴィア　馬鹿か。
57 オリヴァー　あ、そうだ。ストーカーはやめるんだった。
58 フィリップ　ストーカー？
59 オリヴァー　さっさと行けば。あんたはもう自由な女。
60 シルヴィア　ようやく。
61 オリヴァー　手術は成功。僕の腕はあんたの腰から切除されました。
62 シルヴィア　せいせいした。
63 オリヴァー　お近づきになれてよかったです。

シルヴィアは去ろうとする。

64 シルヴィア　シャンパン飲んで。空けちゃって。
65 オリヴァー　オッケ。
66 フィリップ　そうする。
67 シルヴィア　闘いを思い出すんだよ、オリー。
68 オリヴァー　何の闘い？

シルヴィアは去る。

69 オリヴァー　あぁ、その闘いか。

間。

70 オリヴァー　やっ。
71 フィリップ　よっ。
72 オリヴァー　どう？
73 フィリップ　元気。元気だよ。
74 オリヴァー　そう。

長い間。二人公園を見渡す。同時に話し始める。

75 オリヴァー　僕まさか――
76 フィリップ　君もう――
77 オリヴァー　ごめん。
78 フィリップ　ううん。何？
79 オリヴァー　先、どうぞ。
80 フィリップ　いい。君から。

間。

81 オリヴァー　変化って信じる？

82 フィリップ　変化って信じる？
83 オリヴァー　ありがたいよね、僕らって？
84 フィリップ　ありがたい？
85 オリヴァー　つまり、考えてみて。この自由。僕らが手にしてる。
86 フィリップ　どんな自由？
87 オリヴァー　声を上げられない人たちがいた。何百年も、何千年も。
88 フィリップ　世界の大部分ではいまも。声を上げられない。
89 オリヴァー　そう。だからなおさら……
90 フィリップ　なおさら何？
91 オリヴァー　大切だ、ってことかな。いらないものといっしょに大切なものを捨ててしまわないことが。
92 フィリップ　僕らにとって。ついてきてる？
93 オリヴァー　いまいち。
94 フィリップ　ほら、大自然のドキュメンタリーとか見るとさ……
95 オリヴァー　大自然のドキュメンタリー？
96 フィリップ　だから、みんな馬鹿みたいに殺し合ってるでしょ。そんなことばっか。殺し合い。あと繁殖と。とんでもない苦痛を与え合って殺し合って……
97 オリヴァー　イルカを除けば。
たしかに。イルカは年じゅう自閉症の子供と泳いでる。でもイルカを除けば殺し合いばっかりしてる。でも一つだけ、つまり、ただ一つだけ僕らを区別してるもの、僕らをちがうものに、僕らを人間にしてるもの、それは、僕らが発見しつつあるこの力、浸透させなきゃならないこと、何をするにも愛を込めて、愛を与えるってこと。そして何かしらのリスペクト。僕らにはそれしかない。互いに耳を傾けること。

間。

98 オリヴァー　とにかくそういうこと。こないだ言おうとしたのもそういうこと。
99 フィリップ　何？
100 オリヴァー　僕らが出会った夜のこと。あの女性のこと話してくれた。君が写真に撮った人。彼女の立場に身を置く君の力。本物だった。
101 フィリップ　ああ、あれ。
102 オリヴァー　おかげで僕は希望を感じた。

間。

103 オリヴァー　まだ質問に答えてくれてない。
104 フィリップ　何の？
105 オリヴァー　人は変化するって信じる？
106 フィリップ　そうじゃなかった。変化を信じるかって質問だった。人は変化するかじゃなくて。
107 オリヴァー　微調整。
108 フィリップ　どうして？
109 オリヴァー　それは、ほら。僕たち。
110 フィリップ　俺たちが何？
111 オリヴァー　だから……

間。

112 オリヴァー　すごく愛してる。心の底から。

間。

113 フィリップ　今日なんでここ来ちゃったのかなー。
114 オリヴァー　この魅力じゃない？
115 フィリップ　「魔力」だと思うけど。
116 オリヴァー　チャーミングだし。
117 フィリップ　チャラくもなる。
118 オリヴァー　それはそれは。
119 フィリップ　うぬぼれ屋。
120 オリヴァー　素敵。
121 フィリップ　しかもセックス中毒、知らないやつとばっかり。
122 オリヴァー　それはずっと思ってた。
123 フィリップ　でも俺は「疑わしきは罰せず」にしちゃうんだよな。
124 オリヴァー　感謝です。篤い信仰心に。
125 フィリップ　どこまでも頑固な愚かさにね。
126 オリヴァー　とてもかしこいよ、頑固なりに。
127 フィリップ　てゆーか完全に頭おかしい。
128 オリヴァー　かもね。

間、そしてオリヴァーはふと感情に呑み込まれる。あとずさる。

129 フィリップ　何？
130 オリヴァー　何も……僕……
131 フィリップ　何なの？
132 オリヴァー　何も。もしよかったら……
133 フィリップ　よかったら何？
134 オリヴァー　しばらく君んちのソファで寝てもいい？
135 フィリップ　うちのソファで？
136 オリヴァー　仕事が。稼ぎがないかも。いろいろと……自分の本にかかりたくて。
137 フィリップ　てっきり、仕事がたくさん入ってきてると……
138 オリヴァー　みんななんかポシャっちゃって。
139 フィリップ　僕らしくないけど。とにかく厳しくなるかもしれない。しばらくは。
140 オリヴァー　オッケ。でも絶対ソファで。了解。

間。

141 フィリップ　なんだかんだいって……
142 オリヴァー　何？
143 フィリップ　うん、長くはないのかもしれない……
144 オリヴァー　何が？
145 フィリップ　一年半って。
146 オリヴァー　十九ヶ月。今度の木曜日で。
147 フィリップ　僕たち知り合ってから。
148 オリヴァー　結構な年月だよ。
149 フィリップ　大したことないのかもしれないけど……

150 オリヴァー　けど？
151 フィリップ　それなりの歴史だ。
152 オリヴァー　うん。
153 フィリップ　君と俺には……
154 オリヴァー　僕たちには？
155 フィリップ　それなりの歴史がある。

間。

156 フィリップ　それにごめん。
157 オリヴァー　何が？
158 フィリップ　わからない。もし……もし俺が何かしたなら。一度でも。傷つけたり。不安にさせたり。わかんない。何かしたんだとしたら。
159 オリヴァー　僕を裏切った。
160 フィリップ　君を裏切った？
161 オリヴァー　そう。
162 フィリップ　それってどういう……
163 オリヴァー　気にしないで。

間。二人は公園を見渡し、周囲の人々を見る。オリヴァーはフィリップにシャンパンを一杯注ぐ。

164 オリヴァー　シャンパン飲んだら。
165 フィリップ　だな、飲もう。

二人は眺め続ける。

166 オリヴァー　あの二人見える？自転車乗ってる。
167 フィリップ　ラブラブだ。
168 オリヴァー　ブロンドのほうが相手の耳に舌入れてる、僕らが着いたときから。
169 フィリップ　めろめろ。
170 オリヴァー　素敵だね。
171 フィリップ　あの人九十五歳は行ってるね。
172 オリヴァー　誰？
173 フィリップ　あそこの人。アイスクリームのバンのそば。
174 オリヴァー　わかんない。
175 フィリップ　二時の方角。メッシュのタンク。
176 オリヴァー　え、あの人。オーマイガー。
177 フィリップ　九十五歳。
178 オリヴァー　かっこいい。サバイバーだ。
179 フィリップ　彼に祝福を。
180 オリヴァー　僕が九十五歳であのルックスならパーティーひらくね。
181 フィリップ　君が九十五歳であのルックスなら逮捕してもらうよ。

シルヴィアが戻ってくるが、一九五〇年代の彼女の生まれ変わりである。ネグリジェを着て、小さなスーツケースを提げている。オリヴァーとフィリップには見えないが、彼女は舞台の反対側、照明の輪のなかに入ってたたずむ。夢遊病者のようで

182 シルヴィア

ある。

わたしがつぎに目を覚ますのは、旅立ちのとき。あなたはきっとまだ眠ってる。その額にわたしはキスをして静かに歩き出す。いままでのあなたを責めることはできない。あなたは恐怖のとりこだった。ひたすら現実にすがりつくしかなかったの、そしてすがりついたものはみんなその手のなかで死んでしまった。

産みの苦しみ――あなたはそんな痛みに耐えながら、変わりゆく現実にしがみつく。そしてわたしにできるのは遠くからささやくことだけ――心配はいらない、心配はいらない、心配はいらない。

暗転

終わり